

覚阿の入宋求法と帰国後の動向(上)

宋朝禅初伝者としての栄光と挫折を踏まえて

佐藤 秀孝

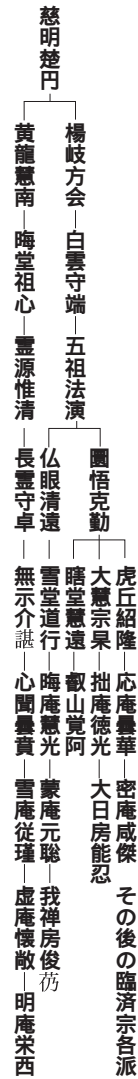
はじめに

平安末期に近江(滋賀県)の比叡山延暦寺の僧であつたとされる覚阿(生没年未詳)といえは、平家政権が隆盛していた頃に入宋求法して宋代の禅宗(宋朝禅)を最初に日本に伝持将来した人として知られている。しかしながら、覚阿の事跡は謎に満ちており、日本での足跡が断片的にししか辿れない上に、実際のところ生没年すら判然としていないのが実情である。

覚阿が入宋渡航したのは十二世紀後半の承安元年(嘉応三年、南宋の乾道七年、一一七一)のことであり、その在宋期間は三年あまりに及んだものらしい。この間、覚阿は南宋の国都である杭州(浙江省)臨安府に到り、杭州钱塘県西北の北山景德靈隠禅寺に上山掛搭し、当代の江南禅林に名声を馳せていた臨済宗楊岐派の瞎堂慧遠(仏海大師、仏海禪師、鉄舌遠、一一〇三—一一七六)のもとで参禅学道する傍ら、浙江・江蘇の江南禅林にも行脚歴遊している。やがて覚阿は大悟徹底して慧遠の印可を得、楊岐派の法統を嗣統しており、『碧巖録』で名高い圓悟克勤(仏果禪師、一〇六三—一一三五)の法孫という肩書きと宋朝禅の初伝者という輝かしい榮譽を担って帰国している。

覚阿と同時期に入宋した日本僧としては、南都(奈良)の重源(俊乗房、一一二二—一二〇六)らの存在が知られているが、彼らはいまだ南宋の禅宗に対しては関心を示しておらず、律宗(南山律宗)や天台宗(趙宋天台)の典籍や文物を日本に将来することに意を注いでいる。そんな中で十二世紀の後半に覚阿が入宋して逸早く禅宗(臨済宗楊岐派)に接近している事実には、きわめて注目すべきものがあるう。しかしながら、そうした華々しい功績にも拘らず、帰国して後の覚阿の活動は突如として途絶えるのであり、いつしか歴史の彼方に忘れ去られて埋没していくことになる。

覚阿の入宋求法につづいて、明庵宋西(葉上房、千光法師、一一四一—一一二五)が黄龍派を、大日房能忍(深法禪師)が大慧派を、律宗の我禪房俊蒞(不可棄法師、一一六六—一二二七)が仏眼派を、それぞれ直接あるいは間接に日本禅林に将来しており、これを宋代臨済宗の法系図で示してみるならば、およそつきのようになる。



覚阿の入宋は宋西の第一次の入宋よりは遅れているが、宋西は最初の入宋でいまだ禅宗に対して積極的な接近を果たしていないことから、覚阿こそ南宋禅林の風規に初めて接し、本格的な宋朝禅を日本に導入した開拓初伝者であったといつてよい。

覚阿について触れた論考としては、辻善之助『日本仏教史』第三卷「鎌倉時代 臨済宗」の箇所、木宮泰彦『日華文化交流史』「入宋僧・帰化宋僧と文化の移植」の「南宋時代に於ける入宋僧一覽表」の「覚阿」の項、船岡誠「初期禅宗受容と比叡山」(今枝愛眞編「禅宗の諸問題」に所収)や同「日本禅宗の成立」(吉川弘文館刊)の「鎌倉時代初期における禅の伝法」などがあり、平安以前の禅宗伝来を扱った書籍には概ね宋朝禅初伝者として覚阿のことが載せられている。しかしながら、いずれも覚阿本人の事跡を中心にまとめられたものではないため簡略にすぎ、これまで本格的に覚阿その人の伝記や禅風について詳しく論じた考察は見られない。本稿における覚阿伝の考察は、史料的に従来の見解を大幅に越えるというものではないが、覚阿個人に対する伝記史料や関連の偶頌など各種の記述を精査した上で、彼が辿った入宋求法の経緯と帰国後の動向について、その稀有なる軌跡を一通り整理してみようとするものである。

そうした状況の中で幸いにも本稿を作るのに前後して、藤田琢司『元亨釈書』訳注(十) 叡山覚阿伝」が『禅文化』第二二二号(平成二二年四月)に載せられ、覚阿伝のみを扱った考察がなされている。さらに同じく『元亨釈書』訳注(十一) 永平寺道元伝」も『禅文化』第二二三号(平成二二年七月)に載せられ、そこには覚阿と道元(仏法房、一一〇〇—一二五三)を含めた贊の部分について考証が存している。『元亨釈書』の覚阿伝に訳注が付され、解説が載せられた点は注目され

る。本稿を作製している途中に出された藤田氏の成果には参考にして頂いた箇所が多く、以下、引用する際には単に藤田「叡山覚阿伝」と称することにした。

『嘉泰普燈錄』と『五燈会元』に載る覚阿伝

そもそも日本僧覚阿の伝記を最初に載せるのは、奇しくも南宋中期の嘉泰四年（日本の元久元年、一一〇四）に雲門宗の雷庵正受（虚中、一一四六—一二〇八）によって編纂された『嘉泰普燈錄』という禅宗燈史にほかならない。『嘉泰普燈錄』巻二〇「靈隠仏海慧遠禪師法嗣」には「覚阿上人」の章として、

覚阿上人、日本國藤氏子也。十四得度受具、習大小乘有聲。二十九、屬商者自中都回、言禅宗之盛。阿奮然拉法弟金慶、航海而來。歲餘始至。乾道辛卯夏也、袖香拜靈隠仏海禪師。海問其來。阿輒書而对、復書曰、我國無禅宗、唯講五宗經論。國主無姓氏、号金輪王、以嘉心改元、捨位出家。名行真、年四十四。王子七歲令受位、今已五載。度僧無進納、而講義高者賜之。某等仰服聖朝遠公禪師之名、特詣文室禮拜。願伝心印、以度迷津。且如心仏及衆生是無差別、離相離言、假言顯之、禪師如何開示。海曰、衆生虚妄見、見仏見世界。阿書云、無明因何而有。海便打。即命海陸座、決疑。明年秋、辞游金陵、抵長蘆江岸、聞鼓声、忽頓悟。始知仏海垂手旨趣。旋靈隠、述五偈叙所見。辞海東帰。偈曰、航海來探教外伝、要離知見脱蹄筌、諸方參遍草鞋破、水在澄潭月在天。其一。掃尽葛藤与知見、信手拈來全体現、腦後円光徹太虚、千機万機一時転。其二。妙処如何説向人、倒地便起自分明、驀然踏著故田地、倒裏曠頭孤路行。其三。

求真滅妄元非妙、即妄明真都是錯、堪笑靈山老古錘、当陽抛下破木杓。其四。豎拳下喝少壳弄、説是論非入泥水、截断千差休指注、一声帰笛囉囉哩。其五。

海称善、書偈贈其行。阿少親文墨、善諸國書。至此未數載、徑躋祖域、其於華語能自通。淳熙乙未、与其國僧統、遣僧訊海、副以水晶降魔杵及數株、膏綵扇二十事、貯以宝函。王寅夏、王請住持其國叡山寺。復遣僧通嗣書、時海已入寂矣。

という記事が載せられている。分量的にはそれほど長文というわけではないが、そこには日本僧の覚阿が在宋中になした事跡を中心に、その前後の日本における動向が些少なながらもまとめられている。编者である雷庵正受は雲門宗の月堂道昌（仏行大師、

仏行禪師、一〇九〇—一一七一、または一〇八九—一一七一)の法を嗣いだ高弟であり、蘇州(江蘇省)平江府治(長洲県)東北の方寿報恩光孝禪寺の住持として『嘉泰普燈錄』三〇巻を編纂している。³⁾『嘉泰普燈錄』が刊行されたのは嘉泰四年(日本の元久元年、一二〇四)のことであり、覚阿が日本に帰国してわずか三〇年あまりを経た時期に相当している。しかも覚阿伝の末尾に「壬寅夏」すなわち南宋の淳熙九年(日本の寿永元年、一一八二)の夏の記事が載せられているが、それは『嘉泰普燈錄』が編纂刊行される僅か二〇余年前のことであり、当時、日本僧覚阿の記事が最新の情報として中国の禅宗燈史に載ること自体きわめて異例のことであったといつてよい。

しかも『嘉泰普燈錄』は十一世紀から十二世紀後半にかけて活躍した禅僧の事跡を丹念にまとめ上げた禅宗燈史として定評があり、正受は単に禅僧のみに注目するのではなく、当代の王侯や官僚士大夫らが如何に禅宗と関わったのかという視点にも意を注いでおり、そうした発想は当然のことながら日本僧の覚阿の章にも十分に窺えるところである。正受が『嘉泰普燈錄』に書き残した内容は、覚阿が師の慧遠に実際に呈した情報記事や帰国後に海を隔てて慧遠のもとに呈した書簡などの記事に基づいていることから、正受もそうした情報を十分に知り得る環境にあつたものと見られる。おそらく社会情勢に敏感な正受であつたからこそ、その編集方針に叶つた人物として同じ時代を生きた日本僧覚阿の事跡に注目し、覚阿の伝記と機縁を『嘉泰普燈錄』の中に収めることができたのであろう。⁴⁾

また『嘉泰普燈錄』といえは『景德伝燈錄』『天聖伝燈錄』『建中靖国統燈錄』『宗門聯燈会要』と並んで五燈として位置づけられており、五燈に伝記や機縁の語句が載せられるのは宋代の禅僧らにとつてきわめて栄誉なことに受け止められている。まして覚阿の事跡が日本僧として初めて五燈の一つ『嘉泰普燈錄』に多くの中国禅僧に伍して収められたことは、初期の入宋僧に対する評価として第一等の特筆すべきことであつたといえる。

この覚阿の記事はその後に編纂された禅宗燈史にも一様に継承されており、その中で最も重要な『五燈会元』巻二〇「靈隠遠禪師法嗣」の「覚阿上人」の章も『嘉泰普燈錄』の記事をほぼ踏襲するかたちでまとめられている。『五燈会元』とは先の五燈を一書に編集し直した書という意味で、杭州銭塘県の北山景德靈隠禅寺でまとめられた燈史であり、ときの住持であつた大慧派の大川普済(一一七九—一二五三)のもとで松源派の雪蓬慧明(友雲、一二二六?)が中心となつて編纂が行なわれ、宝祐元年(一二五三)に刊行されている。杭州の靈隠寺といえは、かつて覚阿が瞎堂慧遠に参学して法を嗣いだゆかりの禅寺にほ

かならない。ただし、『五燈会元』の覺阿の章は『嘉泰普燈錄』と比べて「歲餘始至 乾道辛卯夏也」と「阿少親文墨、善諸國書。至此未數載、徑躋祖域、其於華語能自通。淳熙乙未、與其國僧統、遣僧訊海。副以水晶降魔杵及數株二臂綵扇二十事、貯以宝函」という年時を記した部分が省略され、さらに末尾の「王寅夏、王請住持其國觀山寺。復遣僧通嗣書、時海已入寂矣」という記載も単に「歸本國、住觀山寺。洎通嗣法書、海已入寂矣」と簡略化されている。『嘉泰普燈錄』の記事を越えるような新たな内容を、『五燈会元』の覺阿章に見い出すことは何らできないが、後世への影響という点で『五燈会元』は『嘉泰普燈錄』を遙かに凌駕している。『五燈会元』は単に『嘉泰普燈錄』の覺阿の記事を継承したのみにすぎないが、『五燈会元』に収められたことで、一躍、覺阿の存在は後世の中國禪宗燈史へと受け継がれたのである。

このように南宋後期にまとめられた二つの重要な禪宗燈史に日本僧覺阿の事跡が収められたことは、『嘉泰普燈錄』や『五燈会元』を紐解いた後世の日本の禪僧らにとっても特筆すべき記事として受け止められたはずであり、覺阿の名は中國・日本の禪宗史上に輝かしい不朽の金字塔として刻まれたといつてよい。

『仏海瞻堂禪師広録』と『靈隱仏海禪師遠公塔銘』に載る覺阿

覺阿の事跡を伝える最も古い史料は、覺阿が入宋して參学嗣法した楊岐派の瞻堂慧遠の語録と伝記史料に載る記事である。慧遠には『仏海瞻堂禪師広録』四巻が門人らによって編集されているが、慧遠が示寂した淳熙三年（一一七六）一月より半年余を経た八月一日（中秋）には台州（浙江省）仙居東北三〇里の紫籜山広度寺の前往であった法姪に当たる大慧派の連雲道能が跋文を付し、淳熙四年（一一七七）三月一日（季春望日）に同じく法姪に当たる楊岐派の或庵師体（一一〇八—一一七八）が序文を付して刊行されている。

『仏海瞻堂禪師広録』巻一には後半の蘇州の虎丘山雲巖寺と杭州の高亭山崇先寺と北山景德靈隱寺の三ヶ寺を除き、それ以前の住持地九ヶ寺における上堂語録が収められているが、巻一は覺阿が靈隱寺で慧遠に參学する以前の部分に当たるから、当然のことながら覺阿に関する記事はその間には見られない。巻二は『靈隱仏海禪師入内陞座録』の部分であり、後に詳しく触れるごとく、乾道九年（一一七三）四月八日の奏対語録に一箇所のみ覺阿の作と見られる「日本国法師問道録」のことが取り上げられている。巻三は『仏海禪師小參普說』、『仏海禪師書法語』の部分であるが、そこには「示日本國覺阿」という法語が

収められている。巻四は「頌古」「讚仏祖」「偈頌」「自讚」「小仏事」の部分であるが、「偈頌」の箇所には「送日本国覺阿・金慶二禪人遊天台」と題した偈頌が存している。このように慧遠の語録の中に実際に覺阿が在宋中になした記事が収められており、その内容は第一等の伝記史料ともなっている。

この『仏海瞻堂禪師広録』の宋版が如何にして日本禅林に将来されたのかは定かでないが、あるいは慧遠が示寂して語録が編集刊行された後、慧遠の門人らが同門の覺阿のために遠く日本に寄贈したものかも知れない。仮に覺阿のもとに慧遠の語録が届けられたにせよ、その後、如何なる変遷を経て『仏海瞻堂禪師広録』は現今にまで伝来しているであろうか。

一方、南宋中期の文人として名高い周必大(字は子充・洪道、省齋居士、諡は文忠、一一二六—一二〇四)は廬陵(江西省)の出身で自ら青原野夫と称しているが、『周文忠集』巻四〇(『省齋文稿』巻四〇)の「道釈」の「塔銘」には、覺阿の本師である瞻堂慧遠の伝記として「靈隱仏海禪師遠公塔銘 淳熙五年」が収められている。慧遠が示寂してまもない時期に、慧遠の実弟で台州天台県の天台山国清寺の住持であつた法嗣の晁林が周必大に対して塔銘撰述の依頼をなし、これに応じて周必大は淳熙五年(日本の治承二年、一一七八)にこの塔銘を著しているものであり、慧遠が示寂して三年目に当たっている。しかも注目すべきは「靈隱仏海禪師遠公塔銘」にも、

六年遂開_レ堂於靈隱、賜_レ号仏海禪師。惟聖上神曜得_レ道、虚心応_レ物、屢召_レ師入内、相与問答、而其道益尊。明年有_レ日本僧覺阿、通_レ天台教乘、頗工_レ書、能道_レ諸国語。初來謁_レ師、氣甚銳。師徐以_レ禅宗_レ曉_レ之。覺阿留_レ三年、作_レ投機五頌而去。他日因_レ海商、附_レ其国圖城寺主者覺忠_レ持_レ書來謝。其為_レ遠人所_レ敬、如此。淳熙二年閏九月旦、師上堂說_レ偈言十句(後略)。

として覺阿に関する記載が実際に載せられていることである。この慧遠の塔銘は杭州の靈隱寺(後世、一時期は雲林寺)の寺志である『雲林寺志』巻五「藝文」にもそのまま「靈隱仏海禪師遠公塔銘、宋 周必大」として引用転載されている。ただし、なぜか「靈隱仏海禪師遠公塔銘」は「仏海瞻堂禪師広録」四巻には収められておらず、語録とは別個に撰述されたものらしい。周必大が「靈隱仏海禪師遠公塔銘」を撰じたのは淳熙五年のことであるから、おそらく語録が刊行された直後に塔銘が著されたものと見られ、残念ながら「靈隱仏海禪師遠公塔銘」は語録に収められず、別個に靈隱寺境内の一角に立石されたものである。この当時、帰国して数年を経た覺阿はいまだ健在であつて、『仏海瞻堂禪師広録』に載る記事とともに「靈隱仏海禪師遠公塔銘」に記される内容は、覺阿がいまだ存命の間記された最も古い記述といつこととなる。

浙江省（両浙）の金石史料を集成した『両浙金石志』などには、瞎堂慧遠の塔銘が載せられていないことから靈隱寺でも早くに失われ、すでに後世その内容は『周文忠集』などに拠ってしか知られないものであったらしい。

『元亨釈書』に載る覚阿伝

一方、日本の僧伝や禅宗燈史においてもやがて覚阿の記事が収録されるようになる。もっとも早く覚阿の伝記を収録するのは、聖一派の虎関師鍊（海蔵和尚、一二七八—一三四六）が鎌倉末期にまとめた『元亨釈書』にほかならない。『元亨釈書』巻六「浄禅三之一」の「釈覚阿」（目錄では「香山覚阿」）の章には、

釈覚阿。世姓藤氏。幼上香山。習字有聲。傍親文墨。善梵漢書。嘗聞商客稱宋地禅道之盛。奮然志遠游。遂以承安元年。共弟金慶。踰溟達于杭都。乃孝宗乾道七年也。時仏海遠禅师踞靈隱。道位高。躡下。阿至其室。遠問我國風。阿未通語音。便書曰。國主無姓氏。号金輪王。一種系授。未有移革。僧無進納。而講義高者賜度。風俗和順。奉仏帰僧。然無禅法。只講五宗經論。風聞德義。特詣函文。願伝心印。以度迷津。且如心仏及衆生。是無差別。離相離言。假言顯之。禅師乞垂開示。遠曰。衆生虛妄見。見仏見世界。阿又書曰。無明因何而有。海便打。阿即請遠陞座。決疑。明年秋。游金陵。抵長蘆江。聞鼓聲。忽然頓悟。始知仏海垂手之旨趣。返靈鷲。述五偈。呈所見。其一曰。求真滅妄元非妙。即妄明真都是錯。堪笑靈山老古錫。当陽抛下破木杓。海印其所証。阿辞。海書偈贈行。阿帰朝後。安元之始。附船便。通信于海。水晶数珠綵扇等二十事。貯以宝函。海喜而受之。壬寅夏。通嗣書。海已寂矣。或曰。嘉応帝闈阿禅行。召問宗要。阿横一筈。吹之応制。時機未稔。君臣莫測。惜哉化行不聞乎。

として伝記が載せられており、師鍊が覚阿の伝記を記したのは覚阿が南宋より帰国して一世紀半を隔ててのことである。師鍊が覚阿の伝記を記すのに基としたのは、『五燈会元』ではなく、より詳しい『嘉泰普燈録』の記事と見られ、これに若干ながら師鍊自身が伝聞した日本における活動のさまを付加した内容となっている。ただ、鎌倉後期の師鍊においてもすでに覚阿の伝記が詳しく述べられなかったものらしく、生没年や出自および晩年の事跡など具体的な記事は何ら書き残していない。

また『元亨釈書』の注釈書としても、『洛東比丘惠空和解』として『和解元亨釈書』があり、第三冊目の巻六「釈覚阿」の章に和解がなされている。洛東比丘の惠空とは浄土真宗から天台宗に改宗した惠空（覚賢、曲肱亭、一六四三—一六九一）のこと

であり、この人は江戸初中期に多方面に著述を残している。¹⁸⁾『和解元亨釈書』の覺阿の章では、明末の禪宗燈史のひとつ『教外別伝』巻一〇「覺阿上人」の章がしばしば依用されているが、それほど重要でない『教外別伝』の覺阿伝が依用されているのは、おそらく恵空がたまたま『教外別伝』を見る機会に恵まれていたためであろう。

さらに「丹陽瑞巖比丘智達便蒙・未徒師貞修」として『元亨釈書便蒙』があり、同巻六「釈覺阿」の章における註釈も貴重である。『丹陽瑞巖比丘智達』とは虎関師練の法系上の末葉に当たる聖一派の弦外智達(絃外とも、一六二七—一七〇八)のことであり、この人は丹波(京都府)すなわち龜岡市禪田野町興条大仲の龍峰山瑞巖寺の中興二世で、京都の慧日山東福寺の第二二五一世にも就任している。また師貞とは智達の法を嗣いだ幹山師貞(一六七六—一七四五)のことにほかならず、智達と師貞の師資によって覺阿の章についても注解がなされている。以下、『元亨釈書』とともにその末書である『和解元亨釈書』と『元亨釈書便蒙』の覺阿の記事も江戸期の著述ではあるが、独立した史料として考察の対象としたい。

大休正念の普説に載る覺阿

一方、直接に僧伝や禪宗燈史の記載ではないが、『元亨釈書』が編纂される以前、鎌倉中期に南宋から渡来した松源派(仏源派)の大休正念(仏源禪師、一一二五—一一八九)がその語録において覺阿の在宋中の記事に触れている点も貴重であろう。正念は『大休和尚語録』「告香普説」の「中夏普説」において、

更近舉_下日本先達參_上唐朝宗師親証底因緣、麻啓_上此方五衆信心。信知有_上吾宗最妙最玄一段大事。豈不見_上覺阿上座、習_上大小乘_上有_上声、二十九歲、拉_上法弟金慶、航海入_上大唐、參_上見_上仏海晴堂遠禪師。雖不能_上唐言_上以_上筆書_上問云、心仏与_上衆生、是三無_上差別、離_上相離_上言、假_上言顯_上之、禪師如何開示。仏海曰、衆生虛妄見、見_上仏見_上世界。覺阿問曰、無明因_上何而有_上。海便打_上。阿即命_上仏海_上陞座、決疑。明年秋、辞_上仏海_上、游_上金陵、抵_上長蘆江岸、聞_上鼓声_上、大悟、始知_上仏海垂_上手処_上。旋_上覺隱_上、述_上五偈_上、叙_上所見_上、辞_上歸_上東海。其一日、航海來探_上教外伝_上、要_上離_上知見_上、脱_上蹄筌_上、諸方參_上徧草鞋破_上、水在_上澄潭_上、月在_上天。其二曰、掃_上尽葛藤_上与_上知見_上、信_上手拈來全体現_上、腦後円光徹_上太虚_上、千機万機一時転_上。其三曰、妙処如何説_上向人_上、倒_上地便起自分明_上、驚然踏_上著故田地_上、倒裏_上幞頭_上孤路行_上。其四曰、求_上真滅_上、妄無非_上妙_上、即_上妄明_上真都是錯_上、堪_上笑靈山老古錐_上、当陽抛_上下破木杓_上。其五曰、豎_上拳下_上喝少壳弄_上、説_上是説_上非人_上泥水_上、截_上断千差_上休_上指注_上、一声_上帰笛囉囉哩_上。仏海与_上印証_上、出_上偈送_上行_上。記在_上普燈_上、昭昭可_上考_上。

と述べて覚阿の事跡を紹介している。これはあくまで覚阿が在宋中になした参禅学道の実際を会下の大衆に示すためのものがあるが、正念は末尾に「記は普燈に在り、昭昭として考すべし」と語り、『嘉泰普燈録』から覚阿の記事を引用したことに触れている。当時、すでに『五燈会元』が杭州靈隱寺で編纂刊行されており、正念も来日以前には杭州の禅林を中心に修行しているが、新しい『五燈会元』からではなく、より貴重な『嘉泰普燈録』に依拠している点は注目され、『嘉泰普燈録』が編集されて半世紀以上を隔てた引用ということになる。正念は覚阿を上人ではなく、覚阿上座」という禅僧の称号で呼んでおり、記事内容も若干ながら『嘉泰普燈録』とは相違する箇所が存し、独自に改めている点で別個の伝記史料と見てよからう。

正念は温州(浙江省)永嘉県(永嘉郡)の出身であり、蘇州呉県の万寿報恩光孝禅寺にて曹洞宗宏智派の東谷妙光(一二二五)に参学した後、松源派の石溪心月(仏海禅師、一一七七?—一二五六)の法を嗣いでおり、文永六年(南宋の咸淳五年、一二六九)に日本に渡来している。注目すべきは正念の嗣法師である心月が隋堂慧遠と同じ眉州(四川省)眉山県の出身であり、慧遠が示寂した直後の淳熙四年(一一七七)の頃に出生していることである。心月は慧遠と同じく蘇州の虎丘山から杭州の靈隱寺に住持した経緯があり、しかも慧遠と同じく仏海禅師の勅賜号を宋朝から受けているから、同郷の先哲である慧遠に対して思い入れが深かったものと見られる。おそらく正念は生前の心月から『嘉泰普燈録』に載る慧遠と覚阿の機縁を耳にする機会が存したものでなからうか。

いずれにせよ、正念といえは松源派の蘭溪道隆(大覚禅師、一一二二—一二七八)や破庵派の兀庵普寧(宗覚禅師、一一九七?—一二七六)に次ぐ渡来僧であり、南宋から渡来した正念の口から日本僧覚阿の南宋における遍歴修行と印可証明のさまが門下の人々に語られたことは、覚阿の存在を日本禅林に定着させる上で重要な役割を演じたのではないかと推測される。

江戸期の禅宗燈史・僧伝に載る覚阿伝

室町中期に夢窓派の瑞谿周鳳(臥雲山人、興宗明教禅師、一三九二—一四七三)が撰した『善隣国宝記』巻上にも、

高倉院永安元年。釈覚阿、共弟金慶、踰溟達于杭都、乃孝宗乾道七年也。遂参靈隱仏海遠禅師。阿皈朝后、安元之始、附舶使通信于海。

と覚阿の事跡が簡略に書き残されている。周鳳が実際に依拠したのは『元亨釈書』であろうが、高倉院の「永安元年」と記さ

覚阿の入宋求法と帰国後の動向(上)(佐藤)

れているのは、明らかに「承安元年」の誤りとしなければならぬ。

その後、江戸時代に入って日本の僧伝や禅宗燈史が陸續と編纂され、覺阿の伝記も諸書に収められるようになる。清より渡來した黄檗宗の高泉性激(曇華道人、大円広慧国師、一六三三—一六九五)は、『扶桑禅林僧宝伝』巻一「台山阿禅師伝」において、

禅師、名覺阿。俗姓藤氏。幼受業於台山。声誉著聞、善梵漢書。聞大宋禅道盛行、以承安元年、与其弟金慶、同至杭州、值孝宗乾道七年。時仏海遠和尚、踞靈隱、道僧高邁。師至其室、乞開示。海曰、衆生虚妄見、見仏見世界。師云、無明因何而有。海便打師即請海陞座、決其疑。明年秋、游金陵、抵長蘆江、聞鼓声、忽然大悟、始知仏海用處。乃歸靈隱、述偈呈所見。偈曰、求真滅妄元非妙、即妄明真都是錯、堪笑靈山老古錐、当陽抛下破木杓。海印其所証、乃辞帰。及通嗣法書、海已遷化矣。嘉応帝、知師西伝、祖印、詔問禅要。師拳笛吹之。帝不契。師後不知所終。

贊曰、昔達磨面梁王、一言不契、即折筆渡江。不肯少低其価、曲順王情、千載一人而已。豈料、於阿禅師再見之。所謂眼高氣高、不失宗師体者非耶。

と記しており、かなり簡略にはなっているが、明らかに「元亨釈書」を踏まえて覺阿の伝がまとめられている。また性激は覺阿の章の末尾に「贊曰」として独自の贊語を残しており、覺阿に対する評価として注目される。

ついで臨濟宗大応派(妙心寺派)の正元師蛮(独師、一六二六—一七二〇)が編纂した『延宝伝燈録』巻一には「宋杭州靈隱瞎堂慧遠禅師法嗣」として「江州觀山覺阿禅師」の章が存しており、

江州觀山覺阿禅師。世姓藤氏。十四上、台嶺、得度受戒、習大小乘、善梵漢書。二十九歲、聞商客稱宋地禅宗之盛、奮然志遐遊。遂以承安元年、共法弟金慶、泛瀛、其秋達杭州、乃孝宗乾道七年也。時仏海遠禅師、踞靈隱、道僧高躄下。師袖香詣其室。海問其來。師書曰、某等仰服和尚之名、特詣函丈禮拜。願伝心印以度迷津。且如心仏及衆生是三無差別、離相離言、假言顯之、和尙如何開示。海曰、衆生虚妄見、見仏見世界。師復書曰、無明因何而有。海便打。師即請海陞座、決疑。明年秋、辞遊金陵、抵長蘆江岸、聞鼓声、忽然大悟、始知仏海用處旨趣。旋靈隱、呈五偈曰、

航海來探、教外伝、要離知見、脱蹄筌、諸方參遍草鞋破、水在澄潭、月在天、一首。
掃尽葛藤与知見、信手拈來全体現、腦後円光徹太虚、千機万機一時転、二首。
妙処如何説向人、倒地便起自分明、蹶然蹈著故田地、倒裏嘆頭孤路行、三首。

求「真滅」妄元非「妙」、即「妄明」真都是錯、堪「笑」靈山老古錄、當陽拋「下破木杓」四首。

暨「攀下」喝少弄弄、說是說「非入」泥水、截「斷」千差、休「指」注、一「聲」歸笛囉々哩、五首。

海印「其所証」、及理「師帆」、海書「偈贈」行。師歸來、菴「居」叢山。安元初、遣「僧通」信於海。壽永元年夏、復通「嗣書」、海已遷化矣。高倉帝、聞「師道義」、詔問「禪要」。師即拈「尺八」吹之。

と記されており、おおむね「元亨釈書」の記事をそのまま受けるかたちで覚阿の伝がまとめられている。

この点と同じ「元師蛮」によって編集された『本朝高僧伝』巻一九「淨禪三之一」の「江州叢山沙門覚阿伝」においても、

釈覺阿、世姓藤氏。十四上「齋」奉、削染得度、肄「大小」乘、有「声」講場。傍嗜「文翰」、善「梵漢書」。常着「教理」、疑「心地」不「穩」。聞「商客」稱「宋國禪宗」之盛、奮然志「退遊」。遂以「承安」元年夏、共「法弟金慶」浮「海」。年已二十九。初秋達「於杭州」、即「孝宗」乾道七年也。嘗「偈」海遠禪師、住「靈隱」、道備高「躡下」。阿袖「香詣」函丈。海問「其來由」。阿未「通」語音、輒執「筆書」而對。海復問「我國風」。阿復書曰、國主無「姓氏」、号「金輪王」、一種「系授」、未「有」移革。僧無「進納」、而講義高者賜「度」。風俗和順、奉「佛法僧」。然無「禪宗」、只講「五宗經論」。某等仰「服和尚」之名、特詣「丈室」礼拜、願「心印」以度「迷津」。且如「心仏」及衆生是「三無差別」、離「相離」言、假「言顯」之、和尚如何開示。海曰、衆生虛妄見、見「仏見」世界。阿復書曰、無明因「何而有」。海便打。阿仍請「海陞座」、決「疑」。翌歲秋、遊「金陵」、抵「長蘆江岸」、聞「鼓声」、忽然大悟、始知「仏海垂」手旨趣。回「靈隱」、述「五偈」呈「所悟」。

一曰、航海來探「教外伝」、要「離」知見、脱「蹄筌」、諸方參遍草鞋破、水在「澄潭」、月在「天」。

二曰、掃「尽」葛藤与「知見」、信「手拈來」全体現、腦後「円光徹」、太虚、千機万機「一時」轉。

三曰、求「真滅」妄元非「妙」、即「妄明」真都是錯、堪「笑」靈山老古錄、當陽拋「下破木杓」。

餘慮「蕃而不」記焉。海印「其所証」、尋辭。海書「偈贈」行。阿歸朝、菴「居」叢山。安元初、阿与「延曆」寺座主某、遣「僧通」信於海。贈「水晶降魔杵」并数珠「臂綵扇」二十事、貯以「宝函」。海憚而納焉。壽永元年夏、阿通「嗣書」、海已遷化矣。高倉帝、聞「阿禅行」、召「宮問」禪要。阿即「拈」笛吹之。或曰「尺八」。時機未「稔」、君臣莫「測」。阿直歸「旧菴」、不「復出」世矣。

余謂、自「本朝」入「中華」、參「師得」悟、即時呈「偈者」、宋元之間甚多矣。而看「彼方」之諸錄、不「記」一頌。但受雷菴普燈錄・濟大川五燈會元、獨載「覚阿五偈」、豈以「意句共通」歟。其不「為」皮裏陽秋、也可「見」焉。

とまとめられている。『本朝高僧伝』の覚阿伝には、典故として「嘉泰普燈錄第二十・五燈会元第二十・元亨釈書第六・延宝

伝燈録第一」と付記されており、師蛮は『嘉泰普燈録』『五燈会元』『元亨釈書』の記事を踏まえて総合的に判断しているものらしい。ただし、『本朝高僧伝』の記事は、『延宝伝燈録』に比して内容に若干ながら独自の付加がなされている点、また年時などにも改変が見られる点は注意を払わねばならない。

さらに尾張(愛知県)葉栗郡笹野(いま一宮市笹野)の萬松山妙光寺の住持であった大応派(妙心寺派)の大冥恵団が編集し、文化六年(一八〇六)夏に刊行された『宗門書列祖伝』(詳しくは『本朝伝来宗門書列祖伝』巻四「日本」にも「江州書山覚阿禪師」の章が存しており、恵団は禪宗燈史や僧伝に依りつつも和訓すなわち訓読文で独自に記していることから、成立は新しいものの貴重な成果といつてよい。

一方、『元亨釈書』を受けて著された覚阿の記事として、江戸中期に天台宗の韶鳳敬雄(金龍道人、一七二三—一七八二)によつてまとめられた天台宗の僧伝史料である『天台龍標初編』巻四には「覚阿上人」の項として、

伝曰、承安元年、拉法弟金慶、浮海參仏海遠禪師。翌年秋、遊金陵、抵長蘆江岸、聞鼓声、忽然大悟。海印其所証、呈所悟偈五首。

航海来探、教外伝、要離、知見、脱蹄笠、諸方参過草鞋破、水在澄潭、月在天。其一。

掃葛葛藤与、知見、信手拈来全体現、腦後円光徹、大虚、千機万機一時転。其二。

妙処如何説、向人、倒地便起自分明、驚然踏著故田地、倒囊、幞頭、孤路行。其三。

求真滅妄元非妙、即妄明、真都是錯、堪笑靈山老古錘、当陽抛下破木杓。其四。

豎拳下、喝少弄弄、論是説、非入泥水、截断千差、休指注、一声帰笛囉囉哩。其五。

〔補〕吹笛応制。

元亨釈書 淨禅 曰、嘉応帝、聞阿禪行、召問宗要。阿横一笛、吹之応制。時機未稔、君臣莫側。惜哉化行不闡乎。

伝記、嘉泰普燈録・景德伝燈録・五燈会元・延宝伝燈録。

という記載が存しており、覚阿の伝記が『元亨釈書』を中心にまとめられている。ただし、ここに依拠した伝記史料として『嘉泰普燈録』『五燈会元』および江戸期の『延宝伝燈録』に並んで『景德伝燈録』を挙げているのは明らかな誤りであり、実際には『続伝燈録』巻三「覚阿上人」の章でなければならぬ。

そこで以下、主要な伝記史料の記事を列記した上で、各項目に分けて内容を考察していくことにしたい。その際、それぞれつぎのように伝記史料を略称して載せることにしたい。ただし、各事項について記事が見られない場合はその伝記史料を省略し、つぎの伝記史料の該当部分を詰めて列記するものとする。

普燈…『嘉泰普燈錄』卷二〇、「覺阿上人」の章

会元…『五燈会元』卷二〇、「覺阿上人」の章

大休…『大休和尚語錄』、「告香普説」の、「中夏普説」

元亨…『元亨釈書』卷六、「釈覺阿」の章

和解…『和解元亨釈書』卷六、「釈覺阿」の章

便蒙…『元亨釈書便蒙』卷六、「釈覺阿」の章

扶桑…『扶桑禅林僧宝伝』卷一、「台山阿禅師伝」

延宝…『延宝伝燈録』卷一、「江州叡山覺阿禅師」の章

本朝…『本朝高僧伝』卷一九、「江州叡山沙門覺阿伝」

畧列…『宗門畧列祖伝』卷四、「江州叡山覺阿禅師」の章

出生から出家学道へ

普燈…覺阿上人、日本国藤氏子也。十四得度受具、習二大小乘一有レ声。

会元…覺阿上人、日本国藤氏子也。十四得度受具、習二大小乘一有レ声。

大休…覺阿上座、習二大小乘一有レ声。

元亨…釈覺阿、世姓藤氏。幼上二叡山一、習学有レ声、傍親二文墨一、善二梵漢書一。

和解…釈覺阿八、俗姓八藤氏ナリ。幼フシテ叡山ニノボリ、習学ニ其声ヲ得ラル。傍ニ文章筆道ヲモ手馴テ断バレシガ、梵字漢字イツレモク

ラキコトナシ。

便蒙…釈覺阿、世姓藤氏。幼上二叡山一、十四歳上山、習学有レ声、傍親二文墨一、善二梵漢書一。

覺阿の入宋求法と帰国後の動向(上)(佐藤)

扶桑…禅師、名覚阿。俗姓藤氏。幼受業於台山、声譽著聞、善梵漢書。

延宝…江州叡山覚阿禅師。世姓藤氏。十四上_二台嶺_一、得度受戒、習大小乘、善梵漢書。

本朝…釈覚阿。世姓藤氏。十四上_二書臺_一、削染得度、肆大小乘、有_二声講場_一。傍嗜_二文翰_一、善梵漢書。常着_二教理_一、疑_二心地不穩_一。

書列…宋ノ杭州靈隱_二道憲_一遠禅師ノ法嗣、江州叡山覚阿禅師八、姓八藤氏。十四歳ニシテ叡山ニ登テ得度受戒シ、大小乘ヲ習ヒ、梵漢ノ書ヲ

善シ玉フニ。

はじめに問題とすべきは覚阿が出生した年時であり、その出身地や俗姓などについてであろう。覚阿の入宋以前の動向については伝記史料の記載もきわめて少なく、詳しい事跡がほとんど辿れないのが実情である。

覚阿が出生したのは具体的に何時であったのか、実際のところは明確ではない。従来、覚阿の生年については平安後期の康治二年(一一四三)であったかのごとく記されることが多いが、これは『本朝高僧伝』において覚阿が承安元年(嘉応三年、一一七一)に二十九歳で入宋したとする記述に基づいている。しかしながら、後に詳しく触れるごとく『本朝高僧伝』の語るところは問題であつて、『嘉泰普燈錄』『元亨釈書』の内容からすると、二十九歳で中国の禅宗に関する情報を知ったときの記事と、入宋した承安元年(南宋の乾道七年)の記事との間には、いくぶん歳月の開きが存しているものと解すべきであろう。そのため覚阿が出生したのは、従来いわれる康治二年より数年早く、保延六年(一一四〇)か永治元年(保延七年、一一四二)あたりではなかつたかと推測するものである。この点については後に覚阿の入宋求法の年時を考察する際に詳しく検討し、考察を加えることにしたい。

一方、覚阿の俗姓については諸史料が一樣に「藤氏」と伝えており、藤原氏の一族であつたことが知られる。しかしながら、藤原氏といつても広範であり、具体的に覚阿の両親が誰であつたのか、如何なる氏族に属していたのかは何ら伝えられていない。ただ、具体的な郷閩を記していないことからすると、出身地ないし郷里は京都と見られ、都の貴族(公卿)の子息として出生しているのではなからうか。この点、後に詳しく触れるが、覚阿は近江(滋賀県)の長等山園城寺(三井寺)の長史となつた覚忠(宇治僧正、長谷前大僧正、一一一八—一一七七)と親しい道交をなしていたらしい状況が知られるから、覚忠と血縁的になり近い人であつた可能性が存し、覚忠の父に当たる摂政閩白の藤原忠通(法名は円観、法性寺閩白、一〇九七—一一六四)とゆかりの深い子息であつたのかも知れない。

覺阿が出家得度するに至る状況や過程などは何ら伝えられていないが、『元亨釈書』によれば「幼くして睿山に上る」とあり、『和解元亨釈書』でも「幼ふして睿山にのほり」と記されている。『扶桑禅林僧宝伝』では「幼くして業を台山に受く」と受業(得度)のことが記されているから、覺阿は幼少にして近江(滋賀県)の比叡山延曆寺に上つて天台宗の仏門に投じたものらしい。また『嘉泰普燈録』『五燈会元』によれば「十四にして得度受具し」と記されているから、覺阿は一四歳のとき剃髮得度と登壇受戒を同じ時期に行なっていることが知られる。これに対し、『元亨釈書便蒙』では『元亨釈書』を受けて「幼くして睿山に上る」と記しているが、一説として「十四歳にて上山す」とあつて「一四歳で比叡山に上つた」という説をも引いている。『延宝伝燈録』では「十四にして台嶺に上り、得度受戒す」とあり、「一四歳で比叡山に上つて得度と受戒を行なつたと伝えており、この点は『宗門書列祖伝』も同様である。また『本朝高僧伝』においては「十四にして睿峯に上り、削染得度す」と記されており、覺阿は一四歳のときに比叡山に上つて得度したことになっており、受戒のことは触れられていない。これらを総合的に踏まえて妥当な説を述べるならば、『嘉泰普燈録』と『元亨釈書』を是とし、覺阿は幼少にして比叡山に上り、「一四歳のときに受業師について得度剃髮をなし、さらに同じ年につけて時の天台座主に就いて比叡山戒壇で登壇受戒を行なつたと解するのが正しいである」。

この得度と受戒に際して、受業師ないし天台座主より覺阿という法諱(僧名)が正式に安名されているわけであるが、法諱のほかには房号や別称などは現今に伝えられていない。後に詳しく触れるごとく比叡山の覺阿は禅宗初祖の菩提達磨(円覚大師)に関する『円覚大師講式』一帖を残しており、後に真言密教ないし華嚴宗の明恵上人高辨(一一七三—一二三三)が再編したものが伝えられている。ところが、比叡山の覺阿とほぼ同年と見られる僧として高野山にも覺阿という人が存しており、比叡山の覺阿が足跡を絶つた直後、突如として高野山の覺阿がきわめて短期間ながら興味深い活動をなしている。高野山の覺阿は文治二年(一一八六)六月に四六歳で『灌頂諸流印明』一卷を記しているから、この人の出生年時はまさに永治元年(保延七年、一一四二)といふことになる。もっとも同じ平安末期に真言宗の実範(本願、中川律師、?—一一四四)の伝法灌頂の弟子として別に覺阿(一印房、空心、丈夫上人)といふ名の密教僧が存しており、『灌頂諸流印明』の撰者をこの実範門下の覺阿であるとする説が存している。しかしながら、実範の弟子である覺阿の場合、生没年が定かでないものの、師の実範が示寂した天養元年(康治三年、一一四四)九月にはすでに二〇歳以上の年齢には達していたはずである。ここに取り上げる永治元年生ま

れの覚阿よりは一世代早く活動した僧ということになり、必然的に全くの別人と見なければならぬ。先に述べた私の推測によるならば、比叡山の覚阿は『灌頂諸流印明』を著した高野山の覚阿と同じ永治元年の出生と見られ、両者が実は同一人物であったと解すれば、その間の矛盾が一気に解消されることになる。ただ、そのためには覚阿が後に何らかの事情で比叡山を離れて高野山に籠ったことになり、そこにきわめて興味深い背景が存したものと見なければならぬが、この間の事情についてはいまだ解明しきれていない。

つぎに覚阿に対する表記として、南宋代の『嘉泰普燈錄』と『五燈会元』は「覚阿上人」と記しており、日本僧として上人の称号を用いている。また渡來僧の大休正念は覚阿を「覚阿上座」と呼称しており、逆に禅宗僧侶の敬称・僧階としての上座をもつて任じている。一方、日本の『元亨釈書』と『本朝高僧伝』は「釈覚阿」と述べるのみで称号を用いていないが、『扶桑禅林僧宝伝』と『延宝伝燈錄』では「覚阿禪師」とあり、明確に禅宗の称号として禪師の扱いをなしている。

ところで、『嘉泰普燈錄』と『五燈会元』によれば、覚阿は一四歳で得度と受戒をなしたとされ、『延宝伝燈錄』では一四歳にして比叡山に上つて得度と受戒をなしたとされ、『本朝高僧伝』では一四歳で比叡山に上つて剃髪得度したことになっている。覚阿が一四歳であったのは、『本朝高僧伝』に基づく従來の説によれば、保元元年(久寿三年、一一五六)であったことになっているが、先に示した筆者による推測からすると、その時期は仁平三年(一一五三)か久寿元年(仁平四年、一一五四)の頃である。『統群書類從』第四輯下に所収される『天台座主記』によれば、この頃の天台座主について、

第四十八、權僧正行玄、青蓮院、治山十七年。

京極大殿息、母右大臣師房公女、師主寬慶座主。忠尊座主勝豪法橋受法弟子、良祐阿闍梨灌頂弟子。

保延四年戊午十月廿九日、任座主。御年四十二。(中略)同二年乙亥(久寿二年)十一月五日、御入滅、御年五十九。

第四十九、權僧正敏雲、円融房、治山六年。

堀川院皇子、母伊勢守藤原時隆女。師主仁豪權僧正。又仁実僧正弟子、即隨灌頂。

久寿三年丙午三月卅日、任權僧正、為座主。御年五十三。(中略)同二年壬午(応保二年)二月五日、依病上表、辞退座主職。雖

被返下辞表、未定之間、同十六日、薨逝。春秋五十九。

と記されているから、当時、第四八代の天台座主が青蓮院門跡第一世の行玄(一〇九七—一一五五)であり、この人は保延四年

(一一三八)一〇月に四三歳で座主となり、座主の在職期間が一七年にも及び、久寿二年(一一五五)十一月五日に世寿五九歳で入滅している。さらにつづく第四九代の座主が梶井門跡(三千院門跡)の最雲(円融坊、一一〇四—一一六二)であるが、時期的に見て覚阿が比叡山で得度し受戒したとすれば、行玄が久しく座主を勤めていた期間ということになり、行玄をもって受戒師とすべきであろう。

つづいて『嘉泰普燈錄』と『五燈会元』には得度受具した後、「大小乗を習いて声有り」と伝えていいるから、覚阿は比叡山で大乗や小乗の仏教学を習得して名を馳せたとされる。この点は『元亨釈書』では「習学して声有り」とあり、『扶桑禅林僧宝伝』でも「声譽著われ聞こゆ」と記しているから、やはり覚阿が教学の習得によつて名声を得たことを伝えていいる。『延宝伝燈錄』では単に「大小乗を習う」としているが、『本朝高僧伝』では「大小乗を肄い、講場に声有り」と記しており、覚阿が大小乗の教えを習つて講義の場で名声を馳せたように記している。

また『元亨釈書』では「傍ら文墨に親しむ」と記され、『本朝高僧伝』でも「傍ら文翰を嗜む」とあることから、覚阿は大小乗の教学を修得する傍ら、日頃から文章を作ることに親しみ、墨書にも秀でていたと伝えられている。さらに『元亨釈書』『扶桑禅林僧宝伝』『延宝伝燈錄』『本朝高僧伝』には「様に「梵漢の書を善くす」と記されており、覚阿が梵語(サンスクリット)と漢語の書に通じていたことを特筆している。とくに「和解元亨釈書』では「傍に文章筆道をも手馴て翫ばれしが、梵字・漢字いづれもくらきことなし」といくぶん詳しく記されている。ただ、これらの表現のみでは覚阿がインドや中国の語学に通じていたという意味なのか、単にインドの仏典や中国の儒仏の典籍に通じていたという意味なのか明確でない。いずれにせよ、覚阿が比叡山において学問に精通し、それなりの評価を得ていた事情を伝えるものであるが、『元亨釈書』といえど覚阿の在世時から一世紀余を隔てていることから、僧伝編集上の一般的脚色にすぎないとも解釈されよう。しかしながら、『元亨釈書』は実際には『嘉泰普燈錄』の内容を受けているのであって、『嘉泰普燈錄』の覚阿章では、入宋以前の記事ではなく暗堂慧遠の印可を得て帰国する際の記事として、

阿少親文墨、善諸國書。至此未教戰、徑躋祖域、其於華語能自通。

と述べられている。これによれば、覚阿は年少の頃から文墨に親しみ、諸国の書を善くしたとされ、そのため入宋しても中国語(華語)に自ずと通じていったことが伝えられている。覚阿が揮毫した墨蹟が書簡(尺牘)の類いが現今に残されていれば、

その書風や特徴が知られたはずであるが、残念ながら覚阿に関してはゆかりの品が何も現今に伝えられていない。

実のところ、覚阿の入宋以前の事跡としては、すでに『嘉泰普燈錄』や『元亨釈書』に先んじて、『靈隱仏海禪師遠公塔銘』においても、「有日本僧覚阿、通天台教業、頗工書、能道諸國語」と記されており、覚阿が諸方面にわたり評されていたことが知られる。すなわち、周必大は覚阿について、「天台の教業に通じ、頗る書に工にして、能く諸國の語を道う」と触れており、一つに天台宗の教理に精通していたこと、二つにきわめて書筆に優れていたこと、そして三つには幾つかの國のことばに精通していたことを挙げている。これらはそれぞれ『元亨釈書』で挙げる三つの特色とも相応するものであり、虎関師鍊が『元亨釈書』を編纂するに当たり、『嘉泰普燈錄』のみでなく、『靈隱仏海禪師遠公塔銘』をも実際に閲覽する機会に恵まれていた可能性も存しようか。少なくとも覚阿が天台の教理面のみでなく、墨蹟に秀で諸國の言語にも通じていたことは、何らかのかたちで師鍊の知るところであったことが窺われる。

一方、『本朝高僧伝』のみはさらに「常に教理に着いて疑い、心地は穩やかならず」という記載を付け足している。覚阿が常に天台宗の教理に疑心を抱き、心のうちに穩やかならざるものが存したという内容であるが、これはあくまで元師蛮が付加した記事であって、どこまで真を伝えたものであるかは問題であろう。もともと覚阿がやがて入宋して中国禪宗に触れて實地に參禅學道していることから、覚阿自身としても学問的な教理の研鑽のみに必ずしも満足していなかった点は認めなければならないだろう。

いま一つ後世の記事ながら、覚阿が比叡山の五大院ゆかりの僧ではなかったかと思られる史料が伝えられている。すなわち、天台宗の学僧であつた光宗(性印・道崇、一二七六—一三五〇)が鎌倉末期から南北朝中期に著した『溪嵐拾葉集』巻五七「五大院入唐事、私苗」には、

一、聖一和尚弟子岩松禪師云、五大院者、入唐シテ於大唐大悟究明有ケリ、号阿覚上人ト人は也。帰朝之後者、山門西坂本松崎二住給ヘリト云云。私云、此事依何説耶、不審不審。五大院八前代也、覚阿上人八近代也。此相違如何。

二、日本禅法得悟人事。妙法院頼勇法印夢想云、日本国禅法開悟ノ人ハ、山家大師覚阿上人許也、云云。此頼勇ハ、覚阿上人ノ事ヲハ不知人也。誠感夢様不思議也、云云。

或物語云、覚阿上人、禅法開悟ノ人ト朝帝二聞ケル間、參内シタリケルニ、勅問ニ云、何是禅法。覚阿、即ウソヲ吹テ、即退出ス、云

云。或人物語云、覺阿參内ノ時、勅問云、何是禪法、覺阿力云、上ノ田ノタカエル、下ノ田ノタカエルト申ケリ、云云。という記事が見られる。五大院は平安初期の学僧として知られる安然（阿覺大師、秘密大師、八四一—九一五？）が晩年に比叡山内に創建した寺院であり、安然是五大院に在つて研究と著作に没頭し、天台密教（台密）を大成した学僧とされている。安然には清和天皇（惟仁、水尾帝、法名は素真、八五〇—八八一、在位は八五八—八七六）の勅命によつて撰述したとされる梵字悉曇の解説書『悉曇藏』が存しており、悉曇とはサンスクリットの文字・書体・音韻・文法などに関する伝統的な学問のことである。覺阿が五大院でこつした梵字の研究をなしたのであれば、重要な記事といふことになる。『溪嵐拾葉集』によれば、光宗は東福寺開山の円爾（辨円、聖一國師、二〇二—二八〇）の弟子であつた岩松禪師（未詳）から伝え聞いた内容によつて覺阿の記事を五大院の箇所に取り、また妙法院頼勇法印（未詳）の夢想に基づいて覺阿が帰国して後の事跡を書き記している。その詳細については覺阿の帰国後の動向を述べる箇所を改めて詳しく触れることにしたい。

入宋以前の覺阿の事跡を伝えるものはほとんど存していないが、わずかに覺阿のものではないかと思われる天台宗の講義資料として、『談義日記』一卷が伝えられている。この『談義日記』は『大日本仏教全書』第二四卷「天台小部集釈」第一九に収められており、冒頭の「談義日記目錄」には「沙門覺阿」とあり、実際の『談義日記』本文の初めには「沙門覺阿記」と記されている。『談義日記』はかなりしっかりした漢文体で内容がまとめられており、著者が問いと答えのかたちで天台の教理を示したものであり、天台学にきわめて精通していた状況が窺われる。ただし、『談義日記』には中国宋代の禪宗や天台宗に関するような記事が何ら載せられていないことから、本書の撰者覺阿がいま問題とする入宋僧の覺阿と同一人物であるとすれば、覺阿が入宋する以前に講師として比叡山内で説示したもので、いまだ比叡山の学僧として天台学の講義をなしていた頃の著作といふことになる³⁰つが。

入宋求法

普燈…二十九、屬商者自中都回、言禪宗之盛。阿奮然拉法弟金慶、航海而來、歲餘始至。乾道辛卯夏也。

会元…二十九、屬商者自中都回、言禪宗之盛。阿奮然拉法弟金慶、航海而來。

大休…二十九、拉法弟金慶、航海入大唐。

覺阿の入宋求法と帰国後の動向(上) (佐藤)

元亨…嘗聞商客稱宋地禅道之盛、奮然志遠游。遂以承安元年、共弟金慶、踰溟達于杭都。乃孝宗乾道七年也。

和解…然ルトコロニ、日頃、商客ノ物語ニ、カノ宋地コソ禅宗ノ道盛ナリト称嘆セルユヘ、覺阿ハ急速ニ思立テ、遠ク渡海ノ志ヲ發シ、ツイ

ニ承安元年ヲ以テ、弟金慶ト共ニ、溟ヲ踰テ杭州ノ都ニソ到リケル。教外別伝卷十、靈隱遠法嗣覺阿上人、日本國藤氏子也。十四得度

受具、習大小乘、有聲。二十九、属商者自中都回、言禅宗之盛。覺阿奮然拉法弟金慶、航海而來、云々。普燈錄卷二十覺阿上

人伝ヲ載タリ。釈書ノ伝ト語意大概相同。ソレヨリ五燈全元二モ、五燈嚴統二モ皆入タリ。其折節ハ孝宗ノ乾道七年ナリケル。

便蒙…嘗聞商客稱宋地禅道之盛、奮然志遠游。遂以承安元年、八十代高倉曆、阿年二十九、共弟法弟金慶、踰溟達于杭都、臨

安府也、乃孝宗乾道七年也。南宋第二主孝宗、諱昚、在位二十七年、寿六十七、脱々。宋史卷三十三・四・五御紀也。

扶桑…聞大宋禅道盛行、以承安元年、与其弟金慶、同至杭州、值孝宗乾道七年。

延宝…二十九歳、聞商客稱宋地禅宗之盛、奮然志遠遊。遂以承安元年、共法弟金慶泛瀾。其秋達杭州、乃孝宗乾道七年也。

本朝…聞商客稱宋國禅宗之盛、奮然志遠遊。遂以承安元年夏、共法弟金慶浮海。年已二十九。初秋達於杭州、即孝宗乾道七年也。

晷列…二十九ニシテ、商客ノ宋國禅宗ノ盛ナルヲ稱スルヲ聞テ、奮然トシテ入宋ニ志シ、八十代高倉帝ノ承安元年、法弟金慶ト共ニ海ニシテ、

其秋、杭州ニ達シ玉フ、即チ南宋ノ孝宗ノ乾道七年ナリ。

つぎに天台宗の教学に秀でて比叡山の学僧として頭角を現しつつあつた覺阿が中国禅宗を求めて入宋渡航するに至る状況について考察しておきたい。『嘉泰普燈錄』と『五燈会元』によれば、

二十九にして、商いに属する者、中都より回り、禅宗の盛んなるを言つ。

とあり、覺阿は二十九歳のとき中都より帰つた商人から宋國で禅宗が盛んな様子を聞いたとされる。一方、『元亨釈書』には、

嘗て商客の宋地禅道の盛んなりと称つるを聞き、奮然として遠游を志す。

とあり、年齢は記さないものの、かつて商客から宋地の禅道が盛んである様子を聞き、奮い立つて南宋への遠遊を志したとされる。覺阿に南宋の禅宗の情報を伝えたのは商いに属する者ないし商客と記されており、日宋間を往来していた貿易商人と見られる。また中都とは京師すなわち都の意であるから南宋の國都杭州(浙江省)のことを指していよう。ときあたかも平清盛

(法名は清蓮、六波羅入道、一一一八—一一八二)が日宋貿易を開始してより、しだいに日宋間を往来する日本や宋國の商人(海商)

が増加している。覺阿の入宋と前後してか後白河上皇(諱は雅仁、一一二七—一一九二、天皇在位は一一五五—一一五八)が明州(浙

江省) 鄞東五〇里の阿育王山弘利禪寺に良材などを喜捨して舍利殿の修復に關与し、平重盛(法名は淨蓮、小松内大臣、一一三八—一二七九)も自らの追善のために阿育王山に黄金を奉納したとされている。覺阿と深く関わっていたのは、後に詳しく触れることく榮西の「未來記」に登場する張国安(一に張安国とも)という貿易商(海商)ではなかったかと推測しておきたい。

また『嘉泰普燈錄』、『五燈會元』によるかぎり、二九歳とは覺阿が入宋した年ではなく、中都杭州から帰った商人より宋国における禪宗の盛況ぶりを聞いた時点のことを指しているが、覺阿が二九歳であったときの年号は明記されていない。覺阿が入宋したのは承安元年(一二七二)すなわち南宋の乾道七年のことであり、南宋の禪宗の様子を聞いたのは状況的にそれより数年前と見られるから、覺阿が実際に二九歳であったのも承安元年よりは数年前であったと考えてよいであろう。したがって、覺阿が出生したのは従来いわれる『本朝高僧伝』に基づく康治二年(南宋の紹興十三年、一一四三)ではなく、それより数年早い保延六年(紹興一〇年、一一四〇)か永治元年(保延七年、南宋の紹興十一年、一一四二)の頃ではなかったかと推測される。

ところが、正元師蛮は初め『延宝元燈錄』では『嘉泰普燈錄』の説と、『元亨釈書』の説に基づいて、

二十九歳にして、商客の宋地禪宗の盛んなりと稱するを聞き、奮然として遯遊を志す。遂に承安元年を以て、法弟金慶と共に瀛に泛ぶ。と忠実に記していたのに対し、なぜか『本朝高僧伝』においては内容を微妙に書き改め、

商客の宋国禪宗の盛んなりと稱するを聞き、奮然として遯遊を志す。遂に承安元年の夏を以て、法弟金慶と共に海に浮ぶ。年已に二十九なり。

と記している。『本朝高僧伝』では商客から宋国の禪宗が隆盛しているさまを聞いた年時を記さず、承安元年の夏に金慶とともに入宋したときの年齢を二九歳であったと述べている。これを逆算すれば、覺阿は康治二年(一一四三)の出生であったことになり、『本朝高僧伝』に基づく説は何時しか覺阿伝を語る上での基本のことく幅を利かせるようになる。『本朝高僧伝』の記載内容を是とすれば、博多から来たと見られる商人が京都ないし比叡山で覺阿に相見して初めて南宋の仏教情報を伝え、それから覺阿が入宋の志しを持ち、渡航のための準備をなしていたのが二九歳より以前のできこととなる。そして、ついに承安元年の夏に二九歳で実際に博多まで赴いて商船を乗り換えて東海を渡って南宋の地に到達したと解しているわけである。

もっとも大休正念の普説でも年時は記していないが、文章を簡略化したためか、すでに二九歳で法弟の金慶を引き連れて航海して入宋したことになる。また『元亨釈書便蒙』においても承安元年の註記として、八十代高倉の曆、阿の年二十九

なり」と書き込まれており、やはり承安元年を二九歳のときと解しているから、この捉え方は『本朝高僧伝』に至って突然に現れた説というわけでもない。しかしながら、『元亨釈書便蒙』や『本朝高僧伝』の説はそれ以前の伝記史料と矛盾しており、ここではその記述内容は採用しないでおきたい。

このように、『嘉泰普燈錄』や『元亨釈書』など古い史料で記されていた内容が江戸時代の燈史・僧伝史料や『元亨釈書』の末疏になると巧みに書き改められているのであって、覺阿の入宋年時に關しては『延宝伝燈錄』の記事の方が正しく、『元師蛮』は『本朝高僧伝』でこれを訂正したために、逆に内容を誤ってしまったことになろう。

ちなみに、『元亨釈書』卷二「伝智一之」の「釈栄西」の章などによれば、栄西は仁安三年(南宋の乾道四年、一一六八)四月に日本を發つて第一次の入宋を決行し、半年あまりを経て九月に帰國している。このとき栄西は南宋より天台典籍を將來して比叡山に持ち帰り、天台座主の明雲(慈雲房、一一五一—一一八三)に呈している。栄西が比叡山に戻ったのが正確に何時なのかは定かではないが、年内か翌年の嘉応元年(仁安四年、一一六九)の頃と見られる。栄西の齎した情報は当然のことながら覺阿も注視していたはずであり、あるいは覺阿が南宋の禅宗のことを知ったのもこのときではなかつたかと推測される。

大海を航して南宋に赴くことを決意してから、覺阿は入宋に向けての準備に着手し、南宋の国情や仏教界の事情などできるだけ情報を入手し、朝廷や比叡山より出国渡航の許可を得たり、南宋で通用する僧籍証明書である度牒や戒牒を用意したり、搭乘する商船の都合を斡案するなど、それなりの所要期間が必要であつたはずであり、準備万端が整つた時点で漸く比叡山を離れたものと見られる。

ところで、『嘉泰普燈錄』では「阿、奮然として法弟の金慶を拉いて、航海して来たり、歳餘にして始めて至る。乾道辛卯の夏なり」と記しており、覺阿が大海を航して南宋の地に到つたのを乾道辛卯の夏であつたと伝えている。乾道辛卯とは南宋の乾道七年(一一七七)すなわち日本の承安元年(嘉應三年)のことであり、陰暦の夏は四月から六月の間に当たっている。歳餘とは一年有余の意であるから、おそらく覺阿と金慶は前年の嘉應二年(一一七〇)には京都を發つて西海道を西に下り、筑前(福岡県)の博多津で待機し、商船の都合が着いた時点で入宋渡航しているものと見られ、南宋ないし杭州に辿り着くまでに一年あまりの歳月を費やしたのであろう。ただし、『嘉泰普燈錄』のみが夏に到つたと記しているが、夏に到着した地が南宋の表玄関たる貿易港の明州(浙江省)の府港であつたのか、國都(行在所)の杭州にまで到つたのかは明記されていない。

また『元亨釈書』やその末疏および『扶桑禅林僧宝伝』では単に乾道七年に杭州に到つたと伝えるのみであるが、『延宝伝燈録』では「其の秋に杭州に達す、乃ち孝宗の乾道七年なり」と記しており、元師蛮は覚阿が杭州に到着したのを乾道七年の秋のことであつたと伝えている。一方、『本朝高僧伝』においては「遂に承安元年の夏を以て、法弟金慶と共に海に浮かぶ。年已に二十九。初秋に杭州に達す、即ち孝宗の乾道七年なり」とより具体的なものとなっている。『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』によれば、覚阿は日本の承安元年の夏に金慶とともに日本を発つて大海を航しており、同じ年の乾道七年の初秋（七月）に杭州にまで到達したことになる。

このように『嘉泰普燈録』においては一年あまりをかけて乾道七年の夏に到着したとするが、『本朝高僧伝』では夏に日本を離れて出発し、初秋すなわち七月には杭州に到達したことになっており、ここでも記事内容に矛盾が見られる。しかしながら、この点、最も基本となる『靈隱仏海禪師遠公塔銘』では「明年、有日本僧覚阿、（中略）初来謁師」と記されているのみであつて、ここに明年といふのは乾道六年に慧遠が靈隱寺に住持した翌年の意であるから、覚阿が初めて慧遠のもとに來謁したのを乾道七年と記していることになる。『嘉泰普燈録』の記事によれば、覚阿が慧遠のもとに到つた時期を正しく夏と伝えられているわけであり、『延宝伝燈録』、『本朝高僧伝』は覚阿の旅程を踏まえて夏を秋と改変したために誤つたものといふことになる。もちろん、杭州に到着するまでに実際は明州慶元府の府港に着岸し、僧としての身分を示す度牒と戒牒などを市舶司に提示して入国の手続きを経なければならず、その後、漸く杭州へと向かつたはずであらう。

ところで、諸伝は一樣に覚阿には門人として金慶という僧が存し、覚阿に随侍して共に入宋したことを伝えている。覚阿が入宋するのの際して金慶のほかにも随侍した門人や従者が存したか否かは定かでないが、少なくとも覚阿は単独で入宋したのではなく、信賴すべき従者として金慶を選んで行動を共にしているわけである。ちなみに名著普及会刊『大日本仏教全書』第一〇一冊に所収される『元亨釈書』の覚阿の章には「金慶」について「全力」と註しており、一説として全慶と伝えている。この点、船岡誠氏も『日本禅宗の成立』の「鎌倉時代初期における禅の伝法」では金慶ではなく「全慶」と記している。しかしながら、諸史料によるかぎり全慶と記しているものはなく金慶とするのが正しく、この点は後に示す『仏海瞻堂禪師広録』巻四「偈頌」に載る「送日本国覚阿・金慶二禪人遊天台」の偈頌によつても確かめられる。

また東京大学史料編纂所には夢窓派の太岳周崇（全愚道人、一三四五—一四三三）が著した『三國一覽台運』（原本は仏教大学図

書館所蔵)という神代から室町中期に及ぶ年表の写本が所蔵されており、その承安元年の項には「四月廿一日、改承安。覺阿上人渡宋、參靈隱仏海遠」という簡略な記事が見られ、覺阿が承安と改元されて以降に南宋へと赴いて靈隱寺の仏海禪師懸遠に參學したことが記されている。

本師の瞎堂懸遠について

杭州臨安府に辿り着いた覺阿は金慶とともに錢塘県西北の北山景德靈隱禪寺に赴いて掛搭安居し、ときの住持であつた楊岐派の瞎堂懸遠に參學している。はじめに覺阿の本師となつた懸遠についてその事跡を整理しておきたい。

すでに触れたごとく瞎堂懸遠には伝記史料として、周必大の『周文忠集』(一)に『周文忠公集』(文忠集)とも(卷四〇)、『省齋文稿』(卷四〇)の「道釈」の「塔銘」に「靈隱仏海禪師遠公塔銘 淳熙五年」が収められている。この「靈隱仏海禪師遠公塔銘」は杭州靈隱寺(雲林寺)の寺志である『雲林寺志』卷五「藝文」にも所収されている。一方、禪宗燈史としては『嘉泰普燈錄』卷一五「臨安府靈隱仏海懸遠禪師」の章、『五燈会元』卷一九「臨安府靈隱懸遠仏海禪師」の章、『統集宗門統要』卷一〇「杭州靈隱瞎堂懸遠禪師」の章が古く、僧伝としては『補統高僧傳』卷一〇「瞎堂遠禪師伝」と『大明高僧傳』卷五「臨安府靈隱寺沙門釈懸遠伝」と『南宋元明禪林僧宝傳』卷四「瞎堂遠禪師」の伝などが基本となり、新しくは『新統高僧傳四集』卷一三「南宋臨安靈隱寺沙門釈懸遠伝」も存している。またすでに若干ながら触れたごとく懸遠には『仏海瞎堂禪師伝録』四巻が存しており、懸遠生前のことはをまとめた語録として貴重である。

はじめに最も重要な「靈隱仏海禪師遠公塔銘」について全文を紹介し、瞎堂懸遠について若干の考察をなしておきたい。

靈隱仏海禪師遠公塔銘 淳熙五年。

師姓彭氏、名懸遠。眉山人。先世儒業。父寧、母宋氏。師年十三、因其兄從釈氏、問曰、欲何為乎。兄曰、求解脫耳。師曰、然則我亦可為也、願与兄偕。父母許之。事業師院僧宗辯。問質所疑、辯察其異、語之曰、吾不用你侍奉也。其往參叢林、度有成而帰、吾猶未老也。即祝髮走成都、習經論學於大慈寺。留四年、乃遊諸方、叩請甚衆。復還峨嶓靈巖寺、依黃龍南公之孫微禪師。兩歲、若有所悟、微可之。翼日即告行。同志挽留、不聽曰、師以為可、而吾終未釈然也。聞圓悟動禪師住成都昭覺、造焉。一日圓悟普説、師豁然有得、仆於衆中。衆掖起之。乃曰、吾夢覺矣。至暮、与圓悟問答無滯。圓悟大喜、以偈贈師、有奮鉄

舌軫「閔掖」之語。衆目爲「鉄舌遠」。自此「機鋒峻發、率常屈其上首。紹興乙卯春、眉守延居象耳山、不赴。是歲、圓悟去世、歎曰、哲人云亡、繼之者誰乎。乃扁舟下峽、初抵淮南、住龍蟠山壽聖寺。一年還、琅邪山之開化、又移、葵之普濟。侍郎蘇伯充、一代耆德、日与師談論、俄徒「衢之定業」。時妙喜果公、謫「梅州」、有「伝師偈頌」往者。妙喜駭曰、老師暮年有子如此也。因以書寄「法衣」。遠其歸、相遇甚懽、妙喜極「口稱普之」。自是人益稱焉。俄徒「光孝」、閱十年。安定郡王趙表之、侍郎曾天猷、俱爲「世外交」。後過「南嶽」、住「南臺」。有「龍玉璉」·「方弘行」、皆月菴高弟、道行「湖湘」、竊相謂曰、此間壁立万仞、遠將「何所」、置足乎。及聞其議論、超詣始大歎服。璉率其屬、環拜曰、此膝不「屈於人」久矣。未幾過「天台」、歷「住護國」·「國清」·「鴻福」三寺。乾道丁亥、沈尚書德和守「平江」、以「虎丘」比不得人力、邀師。至則接物無倦、戶外屢滿、繼素悅服。名達「闕下」、五年有詔、住「高亭山崇先寺」。六年遂開「堂於靈隱」、賜「号」曰「海海師」。惟聖上神曜得「道」、虚心応物、屢召師入内、相与問答、而其道益尊。明年、有「日本僧覺阿」、通「天台教業」、頗工書、能道「諸國語」。初來謁師、氣甚銳。師徐以「禅宗」曉之。覺阿留三年、作「投機五頌」而去。他日因「海商」、附「其國圓城寺主者覺忠」、持「書來謝」。其爲「遠人所敬」、如此。淳熙二年閏九月旦、師上堂說「偈言十句」。末云、相喚相呼歸去來、上元定是正月半。都下喧伝而疑之。師有「弟曉林」、亦出家且得「法於師」、方住「國清」、至是招以來、若有所屬。明年感「微疾」、果以「上元」安坐而化。齋留十日、顔不變。是月二十五日、葬「烏峰之塔」。寿七十四。僧臘五十九。後事實林主之。伝其道、又有「了宣」·「齊己」·「了乘」·「師玉」·「元靖」·「紹鴻」·「如本」·「尼法真」、皆住「大刹」云。某始識師於「虎丘」、晚乃見之「靈隱」、愛其辯、而有「宗峻而能通」、故案与之語。師既葬、而林數以「銘爲請」、且曰、吾師遺言也。久之乃爲「銘」曰、

禅有頓門、無言爲宗、世或待喩、假言以通。惟其善鳴、譬之雷風、言而非言、以開靈覺。猗与遠師、心伝大雄、如応響谷、如待問鐘。既得其承、龍象影從、明詔再錫、又彰其逢。發明正宗、摧折妄庸、法席屢遷、道契九重。於古有光、爲普益衆、順緣而帰、自昔所同。明月掬影、浮雲無蹤、我爲銘詩、刻劃太空。如彼戲論、記其初終。

というものであり、慧遠が亡くなって三年目に当たる淳熙五年（一一七八）に、周必大が慧遠の実弟で嗣法門人の曉林から依頼を受けて撰述していることが知られる。したがって、「靈隱仏海禅師遠公塔銘」は覺阿が帰国して僅か数年後に著された記事であり、その記載内容の信憑性はきわめて高いものといつことにならう。ただ、「靈隱仏海禅師遠公塔銘」はなぜか「仏海瞻堂禅師広録」には収められておらず、塔銘と語録はそれぞれ別個にまとめられていることが知られる。おそらく「靈隱仏海禅師遠公塔銘」は慧遠一代の事跡を顕彰すべく実際に靈隱寺の一角に建立されたはずであり、そこには立石の年時やこれに関わ

つた人々の名なども細かに刻まれていたものと見られるが、残念ながらすでに石碑そのものは現今に伝えられていない。

慧遠は眉州(四川省)眉山県の出身で俗姓が彭氏とされ、その出生は北宋末期の崇寧二年(一一〇三)に当たっている。儒者の家に生まれており、父の名は彭寧、母は宋氏とされている。一三歳のとき実兄(名は未詳)とともに父母に願って、郷里の薬師院の宗辯に就いて出家している。ちなみに後に実弟の曉林も仏門に投じ、やがて慧遠の法を嗣いでいるから、三兄弟がともに出家の道を行んだことなる。その後、慧遠は成都府(四川省)華陽県東の大慈寺において四年間にわたって仏教学を学び、さらに嘉定府峨眉県の峨眉山の靈巖寺(護国光林寺)に赴いて黄龍派の靈巖紹徽に参禅している。そんな折り、慧遠は楊岐派の圓悟克勤(仏果禪師、一〇六三—一一三五)が成都府成都東北一五里の昭覺禪寺に住持したのを耳にし、再び成都に戻ってその門下に投じている。克勤は五祖法演(東山、?—一〇四)の法を嗣いで楊岐派の正系を嗣続し、『碧巖録』を拈提するなど絶大な接化をなしており、当代随一の禅僧として名声を馳せていたのであり、克勤が昭覺寺に住持したのは建炎三年(一一二九)のことであるから、慧遠はそれ以降に克勤のもとに参じたことなる。一日、慧遠は克勤が語る普説を聞いて豁然と大悟し、問答商量の末に克勤より印可を受けている。慧遠の同門の法兄には虎丘紹隆(瞌睡虎、一〇七七—一一三六)や大慧宗杲(妙喜、大慧普覺禪師、一〇八九—一一六三)らが存しているが、慧遠はまさに克勤が晩年に育成した最後の法嗣であつたといつてよい。

紹興五年(一一三五)八月に克勤が示寂した後、慧遠は淮南に到つて滁州(安徽省)西南二里の龍蟠山寿聖禪院に開堂出世し、ついで同じ滁州南一〇里の琅琊山開化禪院に住している。さらに婺州(浙江省)永康県西北四五里の普濟禪院、衢州(浙江省)西安県東四〇里の子湖山定業禪院、衢州江山県南四〇里の報恩光孝禪院、潭州(湖南省)衡山県の南嶽山(衡山)南臺禪院に住持した後、台州(浙江省)に到つて、天台県西北二〇里の護国広恩禪寺、天台県北一〇里の天台山景德国清禪寺、黄巖県西八〇里の浮山鴻福禪寺に住持して化導を敷いている。『仏海瞻堂禪師広録』巻一には滁州の龍蟠山寿聖院から台州の浮山鴻福寺に至る九ヶ寺でなされた上堂語録が法嗣の全庵齊己(?—一一八六)や帰雲如本らによって編集されている。その後、乾道三年(一一六七)に慧遠は尚書の沈介(字は徳和)の請で蘇州(江蘇省)呉県西北七里の虎丘山雲巖禪寺に住持し、乾道五年(一一六九)には詔により杭州府城東北の高亭山崇先禪寺(阜亭山崇先顯孝院)に住持しているが、この二ヶ寺における上堂語録はなぜか『仏海瞻堂禪師広録』には全く収められていない。

乾道六年(一一七〇)に至つて慧遠は崇先寺から近隣の杭州銭塘県の北山景德靈隠禪寺に陞住し、その後、しばしば入内して

南宋第二代皇帝の孝宗（趙昚、字は元永、一一二七—一一九四、在位は一一六一—一一八九）の勅問に答えており、仏海大師さらに仏海禪師の勅号を賜っている。『仏海瞻堂禪師広録』にはなぜか靈隱寺における上堂語録は収められていないが、卷二に「靈隱仏海禪師入内陞座録」として慧遠が靈隱寺住持の肩書きで孝宗の勅問に答えた入内陞座録が載せられており、当時の禪僧がときの皇帝と如何なる問答を交わしたのか、その具体的な状況が窺われて貴重である。覺阿が慧遠のもとに参じたのは慧遠が靈隱寺に住持した翌年のことであり、晩年の慧遠にとつて日本僧覺阿が来参したことは、孝宗の勅問に答えた事跡とともにきわめて特筆すべきできごととして受け止められていたことが知られる。

「靈隱仏海禪師遠公塔銘」の撰者周必大は蘇州の虎丘山で慧遠と知り合つて以来、靈隱寺でも慧遠に相見していることから、覺阿とも知己の仲であつたが、少なくとも覺阿の存在に着目していたものと見られる。また慧遠の実弟である晁林も塔銘を依頼する際、日本僧覺阿について触れるべきことを周必大に要請しているものかも知れない。一代の文豪であつた周必大が「靈隱仏海禪師遠公塔銘」に日本僧覺阿の記事を載せたことが縁となつて、雷庵正受も『嘉泰普燈録』を編集する際に覺阿の動向に注目したものであらう。

靈隱寺の慧遠との機縁

普燈…袖…香拜…靈隱仏海禪師。海問…其來。阿輒書而对。復書曰、我國無…禪宗、唯講…五宗終論。国主無…姓氏、号…金輪王、以…嘉応改元、捨…位出家、名…行真、年四十四。王子七歲令…受…位、今已五載。度…僧無…進納、而講義高者賜…之。某等仰…服聖朝遠公禪師之名、特詣…文室…礼拜。願伝…心印…以度…迷津。且如…心仏及衆生是三無差別、離…相離…言、假…言顯…之、禪師如何開示。海曰、衆生虚妄見、見…仏見…見…世界。阿書云、無明因何而有。海便打。即命…海陞座、決…疑。

会元…袖…香拜…靈隱仏海禪師。海問…其來。阿輒書而对。復書曰、我國無…禪宗、唯講…五宗終論。国主無…姓氏、号…金輪王、以…嘉応改元、捨…位出家、名…行真、年四十四。王子七歲令…受…位、今已五載。度…僧無…進納、而講義高者賜…之。某等仰…服聖朝遠公禪師之名、特詣…文室…礼拜。願伝…心印…以度…迷津。且如…心仏及衆生是三無差別、離…相離…言、假…言顯…之、禪師如何開示。海曰、衆生虚妄見、見…仏見…世界。阿書曰、無明因何而有。海便打。阿即命…海陞座、決…疑。

大休…参…見…仏海瞻堂遠禪師。雖…不能…唐言…以…筆書。問云…心仏与…衆生、是三無…差別、離…相離…言、假…言顯…之、禪師如何開示。仏海曰、覺阿の入宋求法と帰国後の動向（上）（佐藤）

衆生虚妄見、見、仏見世界。覺阿問曰、無明因何而有。海便打。阿即命、仏海、陞座、決疑。

元亨、時、仏海遠禪師、陞座、道伽高、下。阿至其室。遠問、我國風。阿未通、語音、便書曰、国主無、姓氏、号、金輪王、一種系授、未有、移革。僧無、進納、而講義高者、賜、度。風俗和順、奉、仏帰、僧。然無、禪法、只講、五宗經論。風聞、德義、特詣、函文、願、伝、心、印、以、度、迷津。且如、心、仏、及、衆生、是、三、無、差別、離、相、離、言、假、言、顯、之、禪、師、乞、垂、開、示。遠曰、衆生虚妄見、見、仏見世界。阿又書曰、無明因何而有。海便打。阿即請、遠陞座、決疑。

和解、時、仏海ノ、慧遠禪師ハ、慧遠ニ住持セシニ、教外別伝卷十、照覺勤法嗣、臨安府慧遠、慧遠、仏海禪師、眉山彭氏子、云云。普燈錄卷十五、仏海慧遠伝アリ。会元・嚴統等ニモ皆出之。慧遠者、杭州臨安府北山景德慧遠禪寺、震旦五山之一也。一統志、仏海、杭州府二載タル飛來峰ガ即慧遠ナリ、道德ノ普、カノ地ノ朝廷マテ高ク振ヒケレハ、覺阿スナハ其室ヲタツ子テ至レリ。サルホトニ慧遠ハ覺阿ニ逢テ、先日本國ノ風儀ヲ問タリシニ、覺阿ソノママ返報セントスレド、カツテ語音ノ通事ナカリケレハ、ヤガテ文字ニ書ツラ子テ見セラレタリ。其辞ニ曰、国主無、姓氏、号、金輪王、一種系授、未有、移革。王鳴鶴所撰書曰、日本國、古倭奴國也。乃至、國王以、王為、姓、歷世不、易。宋史四百九十一、日本國記曰、太宗召見、高僧、乃至、上聞、其國王一姓、伝繼、臣下皆世官、因歎息。僧無、進納、而講義高者、賜、度。風俗和順、奉、仏帰、僧。広輿記日本國風俗曰、初喪戒、酒肉、信、巫好、戲、重、儒書、尚、仏法。然無、禪法、只講、五宗經論。教外別伝覺阿伝曰、国主無、姓氏、号、金輪王、以、嘉、心、改、元、捨、位、出家、名、行、真、四十四。王子七歲令、受、位、今已五載、度、僧無、進納、而講義高者、賜、之。某等仰、服、聖朝、遠、公、禪師之名、特詣、文室、云云。風聞、德義、特詣、函文、書言、故事卷二曰、叙、別、師、席、曰、拜、違、函文。記曲礼上篇、若非、飲食之客、則布、席、席間、函文。註曰、函容也、左右席間、容、一丈之地、欲、其、解、說、之、地、願、伝、心、印、以、度、迷津。且如、心、仏、及、衆生、是、三、無、差別。華嚴晉經卷十一、夜摩天宮菩薩說偈品、如來林菩薩偈曰、心如、工、画、師、画、種、種、五、陰、一、切、世、界、中、無、法、而、不、造、如、心、仏、亦、尔、如、仏、衆、生、然、心、仏、及、衆、生、是、三、無、差別。又唐經、夜摩宮中偈讚品曰、如、心、仏、亦、尔、如、仏、衆、生、然、心、知、仏、与、心、体、性、皆、無、尽、疏、鈔、十九上詳之、離、相、離、言、假、言、顯、之、禪、師、乞、垂、開、示。慧遠ノ曰、衆生虚妄見、見、仏見世界ト、伝、心、法、要、曰、仏、与、衆、生、是、汝、作、妄、見。覺阿又書シテ曰、無明因何而有ト。仏海スナハチ打、覺阿即慧遠ヲ請シ、陞座シテ、疑ヲ決セリ。

便蒙、時、仏海遠禪師、陞座、道伽高、下。会元十九日、円悟勤法嗣、臨安府慧遠、慧遠、仏海禪師、眉山彭氏子。被、旨、補、靈隱、孝廟召對、賜、仏海禪師ト云々。靈隱、支那五山之第一刹也。勝覽臨安府下曰、靈隱寺、在、錢、唐、十二里。靈隱、天竺、阿、山、由、一、門、而、入。文靈隱

又名「武林山」。具見「鐔津文集十二」。阿至「其室」。遠問「我國風」。阿未通「語音」。便書曰「國主無「姓氏」、号「金輪王」、一種系授、未有「移革」。從「國常立生」太古已來、子孫歷世聯綿、無「他姓之雜」、猶「彼金輪王之無「姓氏」。故云爾。且支那・日域之諸釈氏、稱「帝者」多以「金輪」者、比「四輪之中殊勝者」、而「優稱」之也。環珞本業經上曰「世間果報者、金輪王千福子為「普厲」、入「十方仏土」、教「化衆生」、処「四天下」。文詳見「珠林卷五十六等」。異稱「日本伝上」之一曰「本朝風、天子無「姓」、天子孫子稱「王氏」、云云。僧無「進納」、而講義高者賜「度」必用指南曰「進納」、謂「以「希罕等物」貢「上者」。風俗和順、奉「仏帰」僧、然無「禪法」、只講「五宗經論」。或曰「五者法相・三論・華嚴・天台・真言之五大乘宗也」。風聞「德義」、特詣「函丈」。沈休文奏彈曰「風聞、云云。注風采也、采「聰商旅之言」也。注文選四十一。函丈者、借「于曲礼席間函」丈之文、而謂「方丈」也。願伝「心印」以度「迷津」。且如「心仏及衆生是三無差別、離「相離」言、假「言顯」之、禪師乞垂「開示」。晋訳華嚴卷十一、覺林菩薩偈曰「如「心仏亦爾」、如「仏衆生然」、心仏及衆生、是三無「差別」。諸仏悉了知、一切從「心転」。若能如「是解」、彼人見「真仏」。遠曰「衆生虚妄見、見「仏見」世界」。唐訳華嚴二十三曰「衆生妄分別、是「仏是世界」、了「達法性」者、無「仏無」世界」。阿又書曰「無明因「何而有」。海便打「主文字折那」。阿即請「遠陞座、決「疑」。

扶桑…時仏海遠和尚、踞「靈隠」、道価高邁。師至「其室」、乞「開示」。海曰「衆生虚妄見、見「仏見」世界」。師云「無明因「何而有」。海便打。師即請「海陞座、決「其疑」。

延宝…時仏海遠禪師、踞「靈隠」、道価高「躰下」。師袖「香詣」其室。海問「其來」。師書曰「某等仰「服和尚之名」、特詣「函丈」礼拝。願伝「心印」以度「迷津」。且如「心仏及衆生是三無差別、離「相離」言、假「言顯」之、和尚如何開示。海曰「衆生虚妄見、見「仏見」世界」。師復書曰「無明因「何而有」。海便打。師即請「海陞座、決「疑」。

本朝…皆仏海遠禪師、住「靈隠」、道価高「躰下」。阿袖「香詣」函丈。海問「其來由」。阿未通「語音」、輒執「筆書」而对。海復問「我國風」。阿復書曰「國主無「姓氏」、号「金輪王」、一種系授、未有「移革」。僧無「進納」、而講義高者賜「度」。風俗和順、奉「仏法」、僧、然無「禪宗」、只講「五宗經論」。某等仰「服和尚之名」、特詣「文室」礼拝。願伝「心印」以度「迷津」。且如「心仏及衆生是三無差別、離「相離」言、假「言顯」之、和尚如何開示。海曰「衆生虚妄見、見「仏見」世界」。阿復書曰「無明因「何而有」。海便打。阿仍請「海陞座、決「疑」。

喜列…師、靈隠二至テ、仏海ノ遠禪師ニ調シ玉フ。遠ソノ来由ヲ問フ。師、書シテ曰「某等、仰テ和尚ノ名ニ服シテ、特ニ函丈ニ詣シテ礼拝ス。願クハ心印ヲ伝テ、以テ迷津ヲ度セン。且ツ心仏及衆生是三無差別、相ヲ離レ言ヲ離テ、言ヲ假テコレヲ顯ス方如キ、和尚、如何カ開示セン。遠曰「衆生、虚妄ノ見、仏ヲ見、世界ヲ見ルト。師、復書シテ曰「無明何ニ因テカアル。遠便チ打ツ」。

覺阿の入宋求法と帰国後の動向(上)(佐藤)

覚阿が数ある江南禅者の中でなぜ靈隱寺の慧遠をその参学の対象に選んだのかは明記されていないが、おそらく慧遠が靈隱寺に住持してまもなく孝宗に招かれて入内し、勅問に答えるなど江南禅林にその高名が轟いていたことに起因するものである。『元亨釈書』では「時に仏海遠禅師、靈隱に踞し、道徳は輩下に高し。阿、其の室に至る」と記されており、慧遠が国都杭州に名声を馳せていたことから、覚阿がその門に投じたことを伝えている。

また『嘉泰普燈錄』や『五燈会元』によれば、初相見の際に覚阿は香を袖に入れて靈隱寺の慧遠を拝したとされ、『本朝高僧伝』でも「阿、香を袖にして函丈に詣つ」とあるから、覚阿は丈室(方丈)に上って当初から師資の礼をとって慧遠を焼香礼拝したものであろう。ただ、このとき覚阿はいまだ中国語の会話には通じていなかったものらしく、大休正念の普説によれば「唐言すること能わずと雖も、筆を以て書し」とあり、最初の問答は筆談でなされている。

覚阿が慧遠と交わした問答商量はその内容から大きく三段階に分けられよう。『嘉泰普燈錄』にはその商量の第一段として、香を袖にして靈隱の仏海禅師を拝す。海、其の来たるを問うに、阿辄ち書して対う。

と記されており、『五燈会元』も同文である。覚阿は香を袖にして方丈に詣で、薰香して慧遠を礼拝した後、初相見の問答が展開されている。このとき慧遠は最初に覚阿に対して日本からやって来た意図を質問し、覚阿はこれに対して畫面をもって答えたとされ、やはり筆談で答えたことが知られる。『元亨釈書』では「阿、未だ語言に通ぜず」とあり、大休正念の普説とも一致している。覚阿は漢文ないし中国語にもある程度は精通していたはずであろうが、入宋して初めて慧遠に見えたときにはいまだ会話に不慣れであったため、筆談によって自ら対応したものらしい。具体的な内容は記されていないが、おそらく慧遠は初相見で禅の常套手段として「汝名甚麼」とか「甚処来」といった具合に覚阿の名や出身地を問い、入宋参学の意図を探ったものと見られ、覚阿の人となりや禅門を叩いた意志を詳しく点検したことであろう。

第二段の内容はいくぶん長いが、日本国と時の天皇に関して覚阿は『嘉泰普燈錄』においてつぎのように応対している。

復た書して曰く、「我が国に禅宗無し、唯だ五宗の経論を講ずるのみ。国主に姓氏無し、金輪王と号し、嘉応改元を以て、位を捨てて出家し、行真と名づく、年は四十四なり。王子、七歳にして位を受けしめ、今、已に五載なり。僧を度するに進納無し、而して講義の高き者、之れを賜つ」と。

ただし、『元亨釈書』では「遠、我が国の風を問う」とあるから、実際には慧遠の方から覚阿に対して日本の風儀を尋ねた

ものらしいが、『元亨釈書』と『嘉泰普燈錄』では答えの順番が逆になっている。これに対して、覺阿は日本ではいまだ禪宗は存せず、ただ五宗の経論を講ずるのみであると答えている。『元亨釈書便覽』によれば、ここにいう五宗とは日本仏教における大乘の五宗すなわち法相宗・三論宗・華嚴宗・天台宗・真言宗の五つの宗派であると註されている。

『嘉泰普燈錄』や『五燈会元』によれば、つづいて覺阿の答えは日本の天皇家のことに及んでいる。「國主に姓氏無し、金輪王と号す」とあるのは、日本の國主すなわち天皇家には俗姓がなく、万世一系で金輪王と号すると答えたものであり、おそらく雷庵正受はきわめて興味深い王位継承として注目し、内容を『嘉泰普燈錄』に記入しているものである。仏教では仏陀と同じく三十二相と七宝を具えて世俗の世界を統治する理想の王として転輪聖王を説くが、これに金輪・銀輪・銅輪・鉄輪の四王があり、その最上の者を金輪王と称し、須彌山世界の四大洲すべてを統一支配するとされている。さらに覺阿の答えは当時の日本のきわめて具体的な内容へと進んでおり、『嘉泰普燈錄』に「嘉成改元を以て、位を捨てて出家し、行真と名づく、年四十四なり」とあるのは後白河上皇（諱は雅仁、一一二七—一九二）天皇在位は一一五五—一一五八）の出家に関わる記事であり、また「王子、七歳にして位を受けしめ、今、已に五載なり」とあるのは新たに幼い高倉天皇（諱は憲仁、一一六一—一一八一）天皇在位は一一六八—一一八〇）が即位したことをいうものである。ただし、『元亨釈書』では皇室に配慮してか、こうした具体的な上皇の出家や天皇の即位の記事は省かれている。

嘉成改元とは嘉成元年（仁安四年、一一六九）のことであるが、その前年の仁安三年（一一六八）二月に幼い六条天皇（諱は順仁、一一六四—一一七六）天皇在位は一一六五—一一六八）が讓位し、三月に叔父に当たる幼き高倉天皇が即位している。『嘉泰普燈錄』では高倉天皇が七歳で即位して五年が経過していることを伝えているが、そこに一年の誤差が見られる。また『嘉泰普燈錄』で後白河上皇が王位を捨てて出家したとされるのも厳密には誤りであり、あくまで上皇として嘉成元年に出家得度して法皇となったのが実際である。『元亨釈書』巻二六「資治表七」の「嘉成皇帝」によれば、

元年春三月、保元太上皇、幸高野山。夏四月甲午、改元嘉成。六月、太上皇祝髮。

嘉成元年己丑正月、不書即位、去歲三月二十三也。帝保元第三子、諱憲仁。四月改元初八也。六月初七、上皇出家、法諱行真。大僧正覺忠、為戒師。此歲、当乾道五年也。

二年春、夏四月、太上皇受戒于東大寺。秋、冬。

覺阿の入宋求法と帰国後の動向（上）（佐藤）

嘉応二年四月、上皇受戒、二十一也。

と記されており、後白河上皇の第三子である高倉天皇が嘉応元年三月に即位し、六月には保元太上皇すなわち後白河上皇が出家して法名(法諱)を行真と称したこと、このとき出家剃髪の戒師を勤めたのが園城寺の大僧正覺忠であったことが記されており、さらに翌年の嘉応二年四月二二日に後白河法皇は東大寺の戒壇で受戒していることが知られる。嘉応元年は南宋の乾道五年に当たり、覺阿の入宋に先立つ二年前のことである。おそらく覺阿が海商より中国の禅宗のことを伝え聞いたのもその頃のことと見られるから、覺阿は日本の皇室における生の状況を慧遠に伝えていたことになる。

いま一つ「僧を度するに進納無し、而して講義の高き者、度を賜う」として、覺阿は日本の仏教界における僧の得度制度についてその実情を慧遠に説明している。進納とは進め納める、献納する意であり、官に財貨を納めて許可なり資格を得ることであるから、ここではとくに進納得度(買度)を意味し、官に財貨を納めて得度の許可を得る制度ということになる。覺阿としては日本には得度を金銭で得るような制度はないと慧遠に説明してわけである。また「講義の高き者、度を賜う」とは、試験得度を指しているものと見られ、經典の誦誦や意味の解釈などについて試験を行ない、合格した者に対して得度を許可する制度である。形骸化していたとはいえず、日本では試験による得度が存している事実を慧遠に告げているわけであり、具体的には後白河上皇(行真)の得度を称えたものである¹⁴⁾か。

さらに『嘉泰普燈錄』にいう第三段は、覺阿自らが抱いていた疑団を慧遠に披瀝したものであり、

某等、聖朝の遠公禪師の名に仰服し、特に丈室に詣でて禮拜す。願わくは心印を伝えて以て迷津を度せん。且らく「心・仏及び衆生、是の三に差別無し」といふが如きは、相を離れ言を離れ、言を假りて之れを顯わし、禪師、如何んが開示せん。

と質問を發している。冒頭で覺阿が自らを「某等」と表現しているのは、ただ一人で慧遠に参じたのではなく、門人の金慶とともに入室参問したことを意味しよう。覺阿と金慶は宋朝にて慧遠が活躍しているのを予め知り、その名を仰ぎ慕って靈隱寺の方丈に詣で、親しく慧遠を焼香禮拜したことを告げている。これによれば、覺阿と金慶は初めから慧遠に参ずることを目的として入宋していることが知られ、慧遠の活躍が日本の仏教界にも情報として伝えられていたことになる。さらに覺阿は自ら禅宗の心印を伝えて日本に帰り、迷情すなわち迷える衆生を濟度したい旨を慧遠に言上しており、上求菩提と下化衆生をともに願っていた心情も窺うことができる。

ついで覺阿が慧遠に問うたのは「心仏及衆生、是三無差別」という有名な『大方広華嚴經』卷一〇「夜摩天宮菩薩說偈品」に載る偈文の一節である。衆生といい仏というのも心の現われ方であり、平等の理体から見れば心・仏・衆生とも真如であつて、そこに差別はないという道理を、ことばや概念を離れてどのように開示するのかを慧遠に迫っている。この覺阿の質問に対し、慧遠は「衆生は虚妄の見にて、仏を見、世界を見る」と答え、衆生は虚妄の見によつて仏や世界を眺めているとし、衆生と仏を別に見るのはすべて妄見にすぎないと述べている。さらに覺阿が書面にて「無明は何に因りて有る」と問い、無明煩惱がなぜ存するのかを質すと、慧遠はさまざま覺阿を拄杖でか打ち据えているが、これは叩かれることによつて煩惱が起るさまを理論ではなく如実に示さんとしたものである。このとき「即ち海に命じて陸座せしめ、疑いを決す」とあるから、覺阿はさまざま慧遠を請して陸座を願ひ、久しく抱いて来た疑念を決着せんと怯むことなく慧遠に説示を求めている。

一方、周必大も『周文忠集』卷四〇の「靈隱仏海禪師遠公塔銘」において、

明年夏、有「日本僧覺阿、通天台教乘、頗工書、能道諸國語。初來謁師、氣甚銳。師徐以「禪宗」曉之。

と記しており、日本の覺阿が天台宗の教えに通じ、書に堪能な上に、諸国のことばにも通じていたとし、初めて慧遠に謁見した際もその気概がきわめて鋭かったことを伝えているから、覺阿の質問は慧遠にとつてもかなり斬新なものであつたらしい。このとき慧遠は徐々に禪宗の宗旨を示したとされるから、覺阿の氣風を十分に見抜いた上で、しだいに禪門独自の接化を試みたのであろう。

その後、覺阿が慧遠のもとで如何なる參學をなしたのか、後に詳しく触れる『仏海瞻堂禪師伝録』卷三「仏海禪師書法語」の「示「日本國覺阿」という法語の冒頭に、

日本覺阿禪人、泛海而來、參「究達磨正宗、相從日久、執論不已。至「金牛作舞處、似信不信。

と記されており、慧遠が自らの会下に到つた覺阿との関わりを直に記している。これによれば、慧遠は覺阿を禪人と表記しており、覺阿が達磨の正宗すなわち禪の宗旨を參究すべく日本から海を越えて入宋渡航したことを特筆している。しかも覺阿が靈隱寺で慧遠に隨侍すること日に久しく、その間、慧遠と宗要を頻りに論議して止まず、覺阿の論客ぶりに慧遠も圧倒されることがあつた点も述べられている。このとき慧遠は覺阿に対して「金牛作舞」の公案を与えて參究せしめ、參禪學道の要路となしたとされる。

この「金牛作舞」の古則とは、一に「金牛飯桶」の公案とも称され、『景德伝燈録』巻八「鎮州金牛和尚」の章によれば、師自作飯、供養衆僧、每至齋時、昇飯桶、到堂前作舞曰、菩薩子喫飯來。乃撫掌大笑。曰日如是。とあり、一般には『碧巖錄』第七四則「金牛飯桶」の公案によって知られている。鎮州金牛(法諱は不詳)は南嶽下の馬祖道一(大寂禪師、七〇九 七八八)の門人であり、彼は鎮州(河北省)の金牛寺の住職として自ら飯を炊いて常に修行僧に供養していたとされ、齋時(中食)に至る毎に飯桶を両手で持ち上げて僧堂の前で舞をなし、「菩薩たちよ、ご飯を食べなさい」と言つて自ら掌を打つて大笑いしていたと伝えられる。

慧遠はこの「金牛作舞」の公案を覺阿に参究せしめたものらしく、その意図は明確ではないが、おそらく仏教学の理論のみで執拗に問答を挑んでくる覺阿に対し、慧遠はこの古則によって活きた日常底の喫茶喫飯の中にこそ仏法の真理があるとする禪の立場を示そうとしたものではなからうか。覺阿は慧遠が与えた「金牛作舞」の公案を真摯に工夫したものらしいが、このとき「信するに似て信せず」とあるように、容易に慧遠の示した真意に納得できなかったものらしい。金牛は目前の修行僧たちを常に菩薩衆と尊称し、彼らに飯を供養しつつけたのであり、紙面上の理論ではなく活作略を演じてみせたのである。おそらく比叡山で培つて来た天台教学や密教(台密)の立場とは一線を画する中国禪の宗風に対し、覺阿はこれですぐには素直に受け入れ難かつたのであろう。

東福円爾(辨円、聖一國師、一一〇二—一一八〇)の年譜史料である『東福開山聖一國師年譜』の「(建長)七年乙卯」の箇所には破庵派(無準下)の同門に当たる西巖了慧(一一九八—一二六二)が撰した「日本国丞相藤原公捨経之記」を載せているが、了慧はその中で覺阿の事跡に触れ、

竊謂、日域名相之学、与宋相将、而正宗之伝、則兆於覺阿、向金牛作舞处、勸破庵堂。国人歆艶、蔚為之宗。遠、今爾公、益佐興之、与有力也。

と述べている。了慧は破庵派の無準師範(仏鑑禪師、一一七七—一二四九)の高弟で円爾とは同門の法兄弟に当たり、南宋の宝祐三年(一二五五)三月望(一日)に明州慶元府鄞県の天童山景德禪寺の第三九代住持として「日本国丞相藤原公捨経之記」を撰している。了慧は覺阿について「而して正宗の伝は、則ち覺阿に兆し、金牛の舞を作す処に向つて、庵堂を勸破す。国人、歆艶して、蔚んに之れが宗と為す」と記しているが、かつて江南禅林において覺阿が「金牛作舞」の公案を参究して慧遠

の印証を得て帰国した事跡が広く知られていたことを物語る。なお、「日本国丞相藤原公捨経之記」は了慧の語録である『西嶽和尚語録』巻末にも「日本国丞相藤原公捨経記」として載せられており、わずかに「將」の字が「埒」となっているが、「日域名相の学、宋と相い埒りあり」とは、日本の教学が宋の仏教（禅宗）とかなり相違していたことをいうのであろう。

諸山歴遊と聞声悟道

普燈…明年秋、辞游金陵、抵長蘆江岸、聞鼓声、忽然頓悟、始知「仏海垂」手旨趣。

会元…明年秋、辞遊金陵、抵長蘆江岸、聞鼓声、忽然大悟、始知「仏海垂」手旨趣。

大休…明年秋、辞「仏海」、游金陵、抵長蘆江岸、聞鼓声、大悟、始知「仏海垂」手処。

元亨…明年秋、游金陵、抵長蘆江、聞鼓声、忽然頓悟、始知「仏海垂」手之旨趣。

和解…明年ノ秋ニモナレハ、金陵ニ遊ビ、長蘆江ニイタリ、鼓ノ声ヲ聞テ、タチマチニ頓悟セリ。其時ハジメテ仏海ノ手ヲ垂テ示サレタル旨趣ヲ知り、教外別伝ニハ、此ヨリ已下ヲ不載。

便蒙…明年、乾道八年、秋、游金陵、抵長蘆江、勝覽曰、江東路建康府、禹貢揚州之域、楚初置金陵邑。楚威王以「其地有「王氣」、埋金

鎮」之、故曰金陵。喜引、聞鼓声、忽然頓悟、始知「仏海垂」手之旨趣。

扶桑…明年秋、游金陵、抵長蘆江、聞鼓声、忽然大悟、始知「仏海用処」。

延宝…明年秋、辞遊金陵、抵長蘆江岸、聞鼓声、忽然大悟、始知「仏海用処」旨趣。

本朝…翌歲秋、遊金陵、抵長蘆江岸、聞鼓声、忽然大悟、始知「仏海垂」手旨趣。

晝列…師、明年ノ秋、辞シテ金陵ニ遊ビ、長蘆ノ江岸ニ至テ、鼓声ヲ聞テ、忽然トシテ大悟シ、始テ仏海ノ用処ノ旨趣ヲ知玉フ。

その後、乾道八年（日本の承安二年、一一七二）に入つて覚阿は弟子の金慶とともに靈隠寺の慧遠のもとを離れて諸山歴遊の行脚に赴いている。『嘉泰普燈錄』をはじめとする伝記史料によれば、覚阿は直ちに金陵（南京）に到り、長蘆において悟道の機縁が存したかのように伝えている。しかしながら、おそらくそれ以前に覚阿と金慶は初め台州（浙江省）天台県の天台山を目指したものらしい。『仏海瞻堂禪師伝録』巻四の「偈頌」には、

送「日本国覚阿・金慶」禅人遊「天台」。

覚阿の入宋求法と帰国後の動向（上）（佐藤）

仏子親從「日本」来、人天随、歩歎奇哉、一機抄出金牛舞、千聖当頭正眼開。

殺人放火大慈悲、禪教俱非道莫齊、平地一声師子吼、釈迦弥勒暨降旗。

仏子飛、帆過「海来」、好携「餅錫」上「天台」、国師尚有「靈蹤在」、宝塔巍然正面開。

達磨西来教外宗、了無「言説立」全功、単伝直指通身眼、誰信従前徹「骨窮」。

という天台山に雲遊せんとする覚阿と金慶に送った慧遠の偈頌が載せられており、覚阿らが天台山に赴くために慧遠のもとを辞していることが知られる。金慶は門人として在宋期間を通じて常に覚阿と行動を共にしていたものと見られ、覚阿の陰に隠れた存在ではあるが、江南禅林に貴重な足跡を記した初期の日本僧の一人として評価しなければならぬ。慧遠の偈頌の表題が「日本国の覚阿・金慶の二禅人の天台に遊ぶを送る」となっているから、慧遠は覚阿のみでなく金慶に対してもそれなりの配慮をなしていたものであろう。覚阿は台州天台県の天台山に赴く旨を告げて靈隠寺の慧遠のもとを辞し、一路、東南の天台山を目指して金慶とともに行脚したものと解される。おそらく覚阿と金慶はこの年の夏安居が終了した七月一五日の解制を待って靈隠寺を旅立ち、最初に天台山へと足を向けたものであろう。

おそらく覚阿が金慶を伴って天台山を目指したのは入宋以前からの予定された行動であつたと見られ、比叡山僧という肩書きで入宋した身であるかぎり、一度は天台宗祖の智顛(徳安、智者大師、五三八—五九七)や日本の最澄(伝教大師、七六七—八二二)ゆかりの天台山を觀光拜登することが果たすべき責務であつたはずである。あるいは覚阿と金慶は天台山を拜登するという目的で比叡山の許可を得、日本仏法の総府である比叡山から派遣された僧という肩書きが諸方歴遊に多くの便を得ていたのかも知れない。ちなみに最澄は平安初期の弘仁一三年(八三二)六月四日に入滅しており、その三五〇回遠忌は覚阿が入宋した承安元年に当たることから、覚阿は入宋した当年ではなく翌年に至つてようやく念願の一つであつた天台山を訪れることができたのであろう。

そこで、慧遠が覚阿・金慶に贈った偈頌について内容を検討してみることにはしたい。まず慧遠は第一首の偈頌において、

仏子、親しく日本より来たり、人天、歩みに随つ、歎奇なるかな。一機にて抄し出だす金牛の舞、千聖、当頭に正眼開く。

と述べており、覚阿と金慶の両禅人が遠く日本より海を越え、行脚して会下に到つた因縁を愛でている。さらに慧遠は覚阿に対して「金牛作舞」の公案を参究せしめ、何らかの契当の機縁が存したらしいことを称えているから、その後覚阿らは慧遠

のもとを辞したものである。

ついで慧遠は第二首の偈頌において、

殺人放火、大慈悲、禅教俱に非にして道は斉しきこと莫し。平地一声の獅子吼、釈迦も弥勒も豎に旗を降ろす。

とかなり過激な表現をなしている。殺人とはもちろん人を殺すことではなく、ここでは修行僧の己我の念を徹底的に奪い取る意と見られ、放火とは火を点けることから、転じて仏法の燈火を点す意と解し、それが禅匠の大慈悲であると示したものと解しておきたい。二句目は覚阿が禅教いずれにも縛られず、自由な道を求めていることを述べたものであるか。平地一声の獅子吼とは唐代に六祖下の永嘉玄覺（明遠、真覺大師、？七二三）の『証道歌』にいう「獅子吼無畏説」であつて眞の仏の説法の意であるが、ここではとくに覚阿が悟境を深めて示した一句のことであろう。覚阿が示した獅子吼の前では釈迦も弥勒も口を閉ざして説法の旗（刹竿）を降ろす以外にないと結んでゐるわけである。

さらに慧遠は第三首の偈頌において、

仏子、帆を飛げて海を過ぎ来たり、好んで餅錫を携えて天台に上る。国師尚お靈蹤の在る有り、宝塔巍然として正面開く。

と述べてゐる。覚阿と金慶が帆船に乗つて大海を航してやつて来たが、ここに水瓶と錫杖を携えて天台山を目指して旅立とうとするのを送つてゐる。国師とあるのが隋代に活躍した天台宗祖の智顛のことを指すのか、五代宋初に活躍した法眼宗（禅宗五家の一）の天台徳韶（韶国師、八九一—九七二）のことを指すのか定かでないが、靈蹤はいまも巖然として天台山中に残つており、墓塔（宝塔院）は正面が高く開かれてゐると結んでゐる。

いま一つ慧遠は最後の第四首において、

達磨の西来、教外の宗、了に言説無く全功を立つ。単伝直指す、通身の眼、誰か信ぜん、従前より骨に徹して窮まることを。

と述べてゐる。達磨が西来して伝えた教外別伝の宗旨は、言説を超えて悟りのありようそのものを示している。その教えを単伝直指して始めて全身を仏眼として働かせることができるわけだが、気付いてみれば我々はもともと徹頭徹尾そつした仏法の中にあつたのだと結んでゐる。

この慧遠が覚阿らに贈つた四首の偈頌によれば、すでにこのとき覚阿は慧遠の接化によつてかなりの境涯に達してゐたことが知られるわけであるが、慧遠としては更なる向上を期待して覚阿が金慶を伴つて天台山に赴くのを励ましてゐるとも解され

よう。そして、おそらくこの「送^三日本国覺阿・金慶二禪人遊天台」の偈頌に示されているように、覺阿は金慶とともに實際に天台山を訪れ、山中の国清寺(景德国清禪寺)や万年寺(報恩光孝禪寺)あるいは天台石橋(石梁幕府)などを拜登參觀しているものと見られる。

その後、覺阿は金慶とともに反転して台州から北上し、乾道八年の秋九月までの間には金陵すなわち建康府(南京)に歴遊しているものらしい。おそらく夏安居を杭州の靈隱寺で過^二してから台州の天台山に赴き、さらに秋の間には金陵へと辿り着いたものであろう。『嘉泰普燈錄』と『五燈會元』には覺阿の悟道について、

明年の秋 辭して金陵に遊び、長蘆の江岸に抵るに、鼓声を聞きて忽ち頓悟し、始めて仏海の手を垂るるの旨趣を知る。

という機縁が記されており、この点は大休正念の普説や『元亨釈書』さらに江戸期の燈史・僧伝もほぼ同内容となっている。乾道八年の秋に金陵に到った覺阿は金陵から長江を挟んだ対岸に位置する長蘆の岸辺を訪れたとされる。金陵といえは南北朝時代に南インドから渡来したとされる禪宗初祖の菩提達磨が梁の武帝(蕭衍、字は叔達、四六四—五四九、在位は五〇二—五四九)と問答を交わしたゆかりの地であり、覺阿が訪れた南宋中期には建康府と称されており、後には南京として知られる。長蘆というのも達磨ゆかりの地名であり、機縁の契わなかつた梁の武帝のもとを辞した達磨が蘆葉に乗って長江(揚子江)を渡ったという「蘆葉達磨」の故事に準え、後代に真州(江蘇省)儀真県(後世の六合県)南二五里の長蘆鎮に建てられた長蘆崇福禪院(長蘆寺)のことを指している。北宋末期に長蘆寺には雲門宗の長蘆宗頤(慈覺禪師)や曹洞宗の真歇清了(寂庵、悟空禪師、一〇八八—一一五二)などが相繼いで住持しており、かなりの大刹として機能していたことが知られる。

覺阿は長蘆の江岸に到った際、時を知らせる鼓声を聞いて忽ちに頓悟または大悟し、始めて慧遠が慈悲を垂れて示してくれた真意を知ったとされる。覺阿の大悟はいわゆる声を聞いて道を悟るという「聞声悟道」に当たり、瀉山下の香巖智閑(雙燈禪師、?—八九八)が竹の音を聞いて道を明めた「香巖擊竹」の機縁とも一脈通じ、同じく瀉山下の靈雲志勳が桃花の開くのを見て悟った「靈雲見桃花」の機縁すなわち「見色明心」の故事なども類似したものがあろう。

長蘆江岸というのが定かでないが、長蘆が長江に近い真州の長蘆寺のことを指しているのであれば、覺阿が暫し長蘆寺に旦過し、寺内で鳴る鼓の音を聞いて悟道したものであろうか。覺阿が江南禪林で参学していた当時、長蘆寺の住持を勤めていたのは仏眼派の且庵守仁(一—一一八三)か黄竜派の心聞曇貫あたりではなかったかと推測される。

しかし、この覚阿の悟道の機縁は実際には長蘆の江岸ではなく、鎮江府（江蘇省）の金山におけるべきことであつたものよ
うである。すなわち、『仏海瞻堂禪師広録』卷三「仏海禪師書法語」の「示「日本国覚阿」という法語において、

以後令_下往「諸方遊礼」、自「江北回至金山」、聞「擊法鼓」、乃高声云、靈隱禪師、打我一拳。從此知解釈然、如「桶底脱」。

と慧遠が覚阿の悟道について触れている箇所が存している。この法語は覚阿が再び慧遠のもとに戻つた際、慧遠が覚阿に対し
て示した法語であるから、当然、覚阿が語つた悟道の機縁に基づいて慧遠が書き記した内容であつて信憑性が高い。これによ
れば、覚阿は慧遠の指示によつてか諸方の禪刹に掛搭し、また諸地の靈場などを拝登していたものらしく、江北（江蘇北部）か
ら鎮江府丹徒県西七里の金山龍游禪寺に辿り着いている。ときに金山において寺内の法鼓を打つ音を聞いて、覚阿は大声で
「靈隱禪師、我れを打つこと一撃す」と高らかに豪語したとされる。これより覚阿はそれまでの知見解会が氷解し、桶の底が
抜けたかのようにであつたと慧遠は讚嘆している。

『金山志』卷三「方外」の「宋」の箇所から、覚阿が到つた当時、鎮江府の金山龍游寺の住持を勤めていた禪者として可能
性があるのは、雲門宗の雪峰思慧（妙境禪師、一〇七一—一四五）の法嗣である金山了心、楊岐派の別峰宝印（恒寂、禪惠、慈鞭
禪師、一一〇九—一一九〇）やその法嗣である退庵道奇が想定され、楊岐派の水庵師一（一〇七一—一〇七六）の法嗣である
息庵達観（一一三八—一二二二）なども挙げられようか。

註

- (1) 重源らの入宋については奈良国立博物館編『御遠忌800年
記念特別展・大勧進重源 東大寺の鎌倉復興と新たな美の創
出』（二〇〇六年）や中尾堯編『旅の勸進聖・重源』（日本
の名僧、吉川弘文館刊）および横内裕人「重源における宋
文化 日本仏教再生の試み」、『日本と「宋元」の邂逅 中
世に押し寄せた新潮流』アジア遊学二二二、勉誠出版刊）
などを参照。
- (2) 中尾良信「日本禪宗の伝説と歴史」（吉川弘文館刊、歴史文

化ライブラリー一八九）にも「叡山仏教と禪への関心」に
「燈史に載つた唯一の日本人僧、覚阿」として、覚阿に対し
て簡略な考察がなされている。

- (3) 『嘉泰普燈録』巻首に所収される武徳郎の黃汝霖（敬庵）が
撰した「雷庵受禪師行業」によれば、正受は蘇州常熟縣の邵
氏の出身であり、落髮受具した後の記事として、
遊方、首見「応庵華於天童、機縁不契。回「淨慈、依「月堂
昌。昌峭峻少許可識。師於「室中留侍。左右。（中略）尋
謁「無庵全於道場、瞻堂遠於虎丘。仁働堂住「中竺、延賞

上首。

とその參学遊方の過程が記されている。正受は初めに明州鄞県の天童山景德寺で虎丘派の応庵曇華(一一〇三—一一六三)に参じたが、機縁が契わずにそのもとを辞し、杭州錢塘県の南屏山淨慈報恩光孝寺で雲門宗の月堂道昌(仏行禪師、一〇八九—一一七一)のもとに投じて印可を受け、しばらく留まつて室中に随侍している。ついで湖州(浙江省)烏程県の道場山護聖万寿寺で楊岐派の無庵法全(一一一四—一一六九)に謁し、また蘇州吳県の虎丘山雲巖寺で瞎堂慧遠に学んでいる。ちなみに覺阿が慧遠に参じるのは慧遠が虎丘山から杭州錢塘県の靈隱寺に陞住してまもなくのことであるが、ときに正受は楊岐派の伽堂中仁(守仁、一一二〇—一一三三)が靈隱寺に近接する同じ錢塘県の中天竺万寿永祚寺に住した際に招かれて首座を勤めている。正受は道昌の法を嗣いで雲門宗の法統を嗣統しているが、覺阿とは同世代であり、時期こそ相違するものの同じく慧遠に參学した経験が存している。覺阿が靈隱寺の慧遠のもとに在った頃、近隣の中天竺寺の中仁のもとで首座として活躍していることから、おそらく正受は日本僧覺阿が当代随一の高僧として普れの高かつた慧遠の印可を得て帰国した動向を実際に見聞し、早くからその事実を注視していたものと見られる。ちなみに、『仏海瞎堂禪師広録』巻四「小仏事」には、「為月堂和尚入壇」が収められており、慧遠は淨慈寺長老として示寂した月堂道昌のために入壇の仏事をなしている。なお、石井修道「南宋禅をどうとらえるか」(鈴木哲雄編『宋代禅宗の社会的影響』に所収)の「四燈中の『嘉泰普燈録』」には正受に関する考察がなされている。

(4) 覺阿より一世代早く高麗国(朝鮮半島)の坦然(三重大師、大鑑国師、?—一一五八)が同じく江南禅林と関わりを持っており、『嘉泰普燈録』巻一七「高麗国坦然国師」の章や『五燈会元』巻一八「高麗国坦然国師」の章に、その事跡と機縁の語句が記されている。『嘉泰普燈録』によれば、高麗国坦然国師、少嗣王位、欽郷宗業。因海商方景仁、抵四明、録無示語、師聞之啓悟、即棄位円顛。作書以語要及四威儀偈、令景仁呈、無示。示答曰、仏祖出興於世、無一法与人、実使其自信自悟自証自到、具大知見。如所見而説、如所説而行、山河大地草木叢林、相与証明。其来久矣。後復通嗣書、献其所賜曆衲袈・山錦拜褥・青磁香爐等泊開堂語録。其書略曰、生死海広劫彈指、通得過本分宗師、以三要印子、驗定其法。実謂、龜盲値浮木孔耳。

とあり、海商の方景仁が齎した黄龍派の無示介諶(諶鉄面、一〇八〇—一一四八)の語録を読んで啓悟した坦然が、高麗から自らの語要と四威儀偈を遠く明州阿育王山広利寺の介諶のもとに遣わし、面授することなく印可の返書を得たことを伝えている。その経緯はあたかも日本の大日房能忍(深法禪師)の事跡に類似したものといつてよい。また坦然は後に法嗣書を介諶のもとに送り、併せて袈裟・拜褥・香爐など高麗産の高価な品々および開堂の語録を献上したとされる。なお、坦然に関しては、『朝鮮金石總覽』上巻に、「高麗国曹溪宗岫山下断俗寺大鑑国師之碑并序」という碑銘が収められており、比較的詳しい事跡が知られる。坦然の場合、実際に入宋してはいないが、雷庵正受は『嘉泰普燈録』を編

集した際、やはり坦然の事跡に注目し、介誦の法嗣として坦然の記事を載せているわけである。

(5) 『全宋詩』巻一九九一(北京大学出版社刊本では二三三〇)には「釈覺阿上人」の作「偈五首」として「五燈会元」巻一〇「覺阿上人」の章より意遠に呈した偈頌五首を引用する。

(6) 明代以降の禪宗燈史で覺阿の伝記と機縁を載せているのは、『統伝燈録』巻三一「覺阿上人」の章、『教外別伝』巻一〇「覺阿上人」の章、『統燈正統』巻六「覺阿上人」の章、『統燈存彙』巻六「覺阿上人」の章、『五燈嚴統』巻二〇「覺阿上人」の章、『祖燈大統』巻七〇「覺阿上人」の章、『五燈全書』巻四六「日本觀山覺阿上人」の章、『摺黑豆集』巻一「覺阿上人」の章などが挙げられるが、いずれも『嘉泰普燈録』や『五燈会元』に載る記事の範疇を出るものではない。また、『仏祖綱目』巻三八「丙申、仏海慧遠禪師入寂」の箇所にも「覺阿」の記事が付記されている。

(7) 明代初期に日本禪林と最も関わり深い禪宗燈史として編集された『増集統伝燈録』においても、日本に渡来した禪僧として名が載るのは「江心兀庵寧禪師 無伝」、「天寧仲猷祖闡禪師」、「清拙澄禪師 無伝」、「建長竺仙梵仙禪師」、「宝林明極楚俊禪師」という五禪者にすぎず、しかも宋元に赴いて法を嗣いで帰国した日本僧に至っては一人も名が記されていない。ちなみに覺阿のほか日本僧として中国禪宗燈史に見録されているのは、明末清初の「五燈会元統略」巻三下(巻六)の「日本国兜率院夢窓疎石国師」の章、『繼燈録』巻一「日本永平道元禪師」の章のみであり、曹洞宗の永平道元(仏法房、一一二〇—一二五三)と破庵派(夢窓派祖)の夢窓疎石(夢

覺阿の入宋求法と帰国後の動向(上)(佐藤)

窓国師、一二七五—一三五二)の伝記が収められているにすぎない。また『統燈正統』巻七「目錄」には「虚菴敵禪師法嗣」として「千光西禪師 不列章次」とあり、明庵栄西(千光法師)の名が載せられている。

(8) 駒沢大学図書館編『新纂禪籍目録』の「仏海 晴堂禪師語録」の箇所には「又云靈隱仏海禪師語録」とあり、解題に、イ 零本下二冊 宋、晴堂慧遠 音已等編 宋、淳熙

四(序) 宮内

口 零本一冊 永徳二(覆宋刊本) 積翠

ハ(四巻)合 駒大祀統蔵二編二五ノ五 本書八、晴

堂慧遠禪師伝録「トシテ掲ゲ、仏海禪師伝録」ヲ副書名

トス、又内閣文庫二、宋僧語録音已編「トセル写本一冊

アリ之八本伝録卷一ノ語録二当ルモノデアル

と記されている。宋版について椎名宏雄『宋元版禪籍の研究』

(大東出版社刊)の「宋金元版禪籍所在目録」の「仏海晴堂

禪師語録」の項には、

宋版、淳熙四年(一一七七) 序 刊、零本下巻二冊

④ 書陵部

『圖書寮典籍解題』漢籍篇に解題を収録。

と記され、宮内庁書陵部に所蔵される零本下巻二冊の『仏海

晴堂禪師語録』について説明を加えている。ただし、川瀬一

馬『五山版の研究』上巻「解説篇」の「仏海禪師語録(石溪

録)」の項によれば、石井積翠軒の所蔵であった北朝の永徳

二年(一一三八)刊本は慧遠(仏海禪師)の語録ではなく、

南宋末期に活躍した松源派の石溪心月(仏海禪師)の語録であ

(9) 道能は楊岐派(大慧派祖)の大慧宗杲の法を嗣いだ門人であり、「五燈會元」巻二〇「処州蓮雲道能禪師」の章によれば、単に「漢州人、姓何氏」とあり、漢州(四川省)の何氏とされるのみで修行遍歴の過程が定かでない。ただ、「仏海瞻堂禪師広録」巻四「偈頌」に「送能首座住紫籜」が存しているから、やはり慧遠のもとで首座を勤めた後、道能は台州仙居県の紫籜山広度寺に住持していることが知られ、さらに処州(浙江省)麗水県西南の大連雲山の蓮雲禪院に遷住しているのである。『仏海瞻堂禪師広録』巻二末尾に収められた姑蘇(蘇州)の顔度(字は魯子)が書した「靈隱仏海禪師語録序」によれば、「其徒道能、録其語來、屬予為序、有不可辭、因謂之曰、經有「経師、論有論師、諸方自可定当」とあるから、道能は一に慧遠の門人のことと目されていたものらしい。

(10) 或庵師体は楊岐派の此庵景元(元布袋、一〇九四—一一四六)の法を嗣いでいるが、『嘉泰普燈錄』巻二〇「鎮江府焦山或庵師体禪師」の章によれば、「仏海遠禪師移、國清、邀師分座授徒、衲子宗仰。出住、吳門之寛報」と記されている。また、『仏海瞻堂禪師広録』巻一「台州天台山景德國清禪寺語録」に「拳体首座立僧上堂」が存し、同じく巻四「偈頌」にも「寄体首座」が存していることから、師体が天台山國清寺の慧遠のもとで首座として分座説法し、その後、蘇州吳県の寛報禪寺に出世開堂していることが知られる。

(11) 李國玲編著『宋僧著述考』(四川大学出版社刊)には、「瞻堂慧遠禪師広録(仏海慧遠禪師広録、仏海瞻堂禪師広録)四巻、存」について、

慧遠撰、釈育己等編、該語録卷首有釈師体淳熙四年(一一七七)撰「序」。巻二末有顔度淳熙四年(一一七七)撰「靈隱仏海禪師語録序」、葛郷淳熙五年(一一七八)十二月撰「仏海禪師語録後序」、釈徳光撰「序」。巻末有釈道能淳熙三年(一一七六)撰「跋」、又附「特賜仏海禪師住靈隱奏対語録」。

と序跋について記した後、顔度の序と道能の跋を挙げ、末尾に考証として、

按、拋徳光「序」、道能「跋」知、淳熙四年有俊上人「槩版流通」本、但淳熙本今未見、今統蔵経第貳編第二五套第五冊収録

と記している。ただし、李國玲氏は淳熙本(宋版)そのものは閲覧していないことを断っている。

(12) 石井修道『宋代禪宗史の研究』(大東出版社刊)の「資料一九」の「宋代禪者の塔銘・碑銘類一覽表」の「仏海慧遠」の箇所には、「靈隱仏海禪師遠公塔銘」の主な出典として、「省齋文稿四〇「四庫珍二」」が挙げられているが、これは『周文忠集』の前半に当たる。

(13) 『周文忠集』巻一七一の「乾道壬辰南帰録」によれば、乾道八年(一一七二)六月二日の記事として、

己丑天申節、早就「章江院」設供。(中略)遂過「列岫亭」、入「報恩禪院」。長老「曉林」眉山人。歲後有「鉄文殊」甚大。婦人「景德禪院」、觀「銅仏」鑪「鑪」所「鑄也」。登「閣間」塙

と記されている。「靈隱仏海禪師遠公塔銘」に「慧遠の実弟曉林と同じ名であり、しかも慧遠と同じ眉山の出身とされるから、ここにいう曉林は慧遠の法を嗣いだ実弟の曉林には

かならない。このとき曉林は饒州（江西省）鄱陽県列岫亭の報恩禪院（天寧寺か）の長老であったとされるから、慧遠の法嗣として鄱陽県を中心に活動していたものと見られる。その後、曉林は慧遠が示寂した当時は台州天台山の景德国清禪寺に住持しており、周必大に慧遠の塔銘を依頼しているわけである。

- (14) 檀本涉「日中・日朝僧侶往来年表（一一二七—一二五〇）」（平成一六年三月、東京大学大学院人文社会系研究科・村井章介編）八—一七世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流、海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に（上）『に所収』の「覚阿」に関する註によれば、

『文忠集』仏海禪師塔銘に拠れば、覚阿は一一七一年に入宋し在宋三年という。仏海禪師塔銘は覚阿関係資料として従来用いられていなかったが、一一七八年成立で、『普灯録』よりも古く、現状でもっとも信頼すべき史料である。

と述べており、すでに『周文忠集』に記された「靈隱仏海禪師遠公塔銘」の史料的価値に注目している。

- (15) 『嘉泰普燈錄』巻一五「臨安府靈隱仏海慧遠禪師」の章に、
果於「丙申得辛後一日、感「微疾。至「上元、揮「偶安坐而化。偶曰、拗「折秤錘、掀「翻露布、突「出機先、鴉「飛不度。留七日、顔色不異。是月二十五日、塔「全身於寺之烏峰。送者幾万人。世寿七十四、僧臘五十九。」
とあるから、慧遠の全身は靈隱寺の烏峰に葬られて墓塔が建てられたことが知られ、おそろその地に周必大の「靈隱仏海禪師遠公塔銘」も立石されたものと見られる。

- (16) 『南宋元明禪林僧宝伝』巻四「瞻堂遠禪師」の伝と、大明高僧

覚阿の入宋求法と帰国後の動向（佐藤）

伝「巻五「習禅篇第三之一 南宋」の「臨安府靈隱寺沙門釈慧遠伝」と「補続高僧伝」巻一〇「習禅篇 宋」の「瞻堂遠禪師伝」には、いずれも日本僧覚阿について何ら記していない。また、『武林梵志』巻九「古徳機縁」の「靈隱寺」には「瞻堂禪師」の項について「覚阿侍者」の記事が存しているが、簡略な伝記記事と投機の五偈を載せるのみで禅宗燈史の内容を越えるものではない。

- (17) 『元亨釈書』巻六「浄禅三之一」には、「唐国義空」「書山覚阿」「永平寺道元」「長楽寺宋朝」「松島寺法心」「驚峯覚心」「宋国道隆」「宋国普寧」「浄妙寺了然」「東福寺普門」「南禅寺徳俊」という一人の禅者の伝が収められており、その中で覚阿は平安初期に渡来した唐僧の義空について章が設けられており、師鍊は覚阿と道元をまとめて贊している。なお、『元亨釈書』の覚阿伝に関する訳注としては、先の藤田琢司「元亨釈書訳注（十） 叡山覚阿伝」（『禅文化』第二二二号、平成二二年四月）のほか、今浜通隆訳「元亨釈書 仏教説話の宝庫 原本現代訳 62」（『教育社新書』の「叡山覚阿」の箇所が存する。

- (18) 『江戸初中期に天台宗の覚賢恵空（曲肱亭、一六四三—一六九一）と浄土真宗（大谷派）の得岸恵空（光遠房、秀光堂、一六四四—一七二二）という二人の恵空が存している。ともに学僧として多くの著述を残しているが、『和解元亨釈書』を著しているのは天台宗の恵空である。恵空は紀伊（和歌山県）名草郡の木曾氏の出身で、浄土真宗の浄福寺の子として生まれたが、比叡山に上って修学し、天台宗に転宗している。『和解元亨釈書』のほか、『新刊節用集大全』「専修専念鈔』

『無尽燈』など多方面の著述が存している。中田祝夫『惠空編 節用集大全研究並びに索引』(昭和五〇年刊)の研究がある。

(19) 弦外智達については、白石虎月『東福寺史』の「宝永五年」の「九月十八日、東福寺 第二百五十一世 弦外智達寂」の箇所に、比較的長編な「瑞岩弦外和尚伝記」を収めており、智達の事跡をかなり克明に辿ることができる。さらに「瑞岩弦外和尚伝記」には「付記」として簡略な「幹山師貞伝」も載せられているが、幹山師貞についてはその著「圓悟心要添足」巻末により詳しい「幹山和尚行実」が収められている。

(20) 『大休和尚語録』告香普説の「中夏普説」は、名著普及会編『大日本仏教全書』第九六冊の九五頁上段から九七頁下段に収められており、覺阿の記事は九七頁上段から九七頁下段に存する。正念がいずれの寺院で中夏普説をなしたものは定かでないが、おそらく鎌倉の龜谷山寿福寺あたりでなされたものではないかろうか。正念はさらにつけて、

大衆、我宗奇特、当陽顯赫、譬如獅子筋琴絃絃、音声為之屏絶、獅子一滴乳、六斛驢乳、為之迸散。上根上智、証者方知、下愚下劣、多聞不信。諸仁者、只今但似覺阿上座、為參玄標榜。諦信不疑、更不必航海越漢千辛万苦、祇按下雲頭、就自己脚跟下、密密体究看。佗覺阿問「仏海、無明從何而有底句。看到看不到處。參到參不到處。忽然自家漆桶子迸裂。山僧不辭与爾証拠。方知、大唐國裏、日午打三更、日本國裏、三更日卓午。亦知、玄沙老漢、不出飛鷹嶺、築破脚指頭。達磨不來東土、二祖不往西天。不汝欺也。珍重。」

と述べている。宗門の奇特の事とは悟道の機縁のことであり、正念はその好事例として覺阿の記事を取り上げ、門下の修行者に參玄の標榜となしている。

(21) 大休正念には『大休和尚語録』(『念大休禪師語録』とも)六巻が存しているが、特定の伝記史料は残念ながら収められていない。『元亨釈書』巻八「釈正念 宋正念」の章、『延宝伝燈録』巻三「相州金峰山淨智寺大休正念禪師」の章、『本朝高僧伝』巻二「相州淨智寺沙門正念伝」として伝記が存しているが、いずれも内容が簡略であって、詳しい伝記記事が見られない。ちなみに正念は最初に宏智派の東谷妙光に蘇州呉興の万寿報恩光孝寺で参学しているが、蘇州の万寿寺はかつて雲門宗の雷庵正受が『嘉泰普燈録』を編集したゆかりの禪寺である。

(22) 瞎堂慧遠は生前に仏海大師と仏海禪師の勅号を受けているが、これより早く雲門宗の智訥(妙空大師、仏海大師、一〇七八—一五七)が妙空大師の勅号を賜った後、杭州靈隱寺に住持して仏海大師の勅号を賜っている。また後に松源派の石溪心月も靈隱寺に住持して仏海禪師の勅号を賜っている。心月は『石溪和尚語録』巻上「住平江府虎丘山雲巖禪師語録」の末尾に載る、淳祐丙午八月初一日、在寺受靈隱請、拈勅黃示衆において、

誤蒙聖恩、補靈山虛席、自慙衰朽、豈堪是任。因思瞎堂叔祖・松源師翁、皆自此山、而遷彼処。と述べており、靈隱寺入寺の招聘を受けた際、慧遠のことを「瞎堂叔祖」と尊称し、師翁の松源崇嶽とともに靈隱寺歴代住職の代表として尊崇している。また慧遠と崇嶽それに心月

自身がいずれも蘇州吳県の虎丘山雲巖寺より杭州の靈隱寺へと陞住していることが知られる。いま一つ注目すべきは「物初贈語」巻二四「行状」の「石田禪師行状」によれば、

師名法黨、号石田。眉山彭氏。前靈隱堂遠公。当淳熙間、詔問「佛法、妻对稱旨、賜号仏海禪師。其族祖也。とあり、破庵派の石田法黨（一一七一—一二四五）も眉州眉山県の彭氏とされ、しかも法黨にとつて懸遠は族祖であつたことが明記されている。

(23) 『善隣国宝記』三巻は「統書類從」第三〇輯上や「改訂史籍集覽」第二冊に所収されている。瑞溪周鳳が文正元年（一四六六）から文明二年（一四七〇）にかけて完成させたもので、日本と中国・朝鮮との交渉に關して、上巻には出典を明記した年代記を載せ、中巻には明や朝鮮との間の公式文書を、下巻には明や朝鮮への贈答品の目録などを載せている。

(24) いま一つ豊後（大分県）の漢学者であつた伊藤松（字は貞一、号は威山）が江戸末期の天保年間（一八三〇—一八四四）に編集した『鄰交徵書初篇』巻一「宋」には、雲門宗の雷庵正受が記した「日本国覺阿上人伝」として「嘉泰普燈錄」の「覺阿上人」の章をそのまま引用し、末尾に「我邦禪法、自阿以還稍盛。而阿之派無「嗣者、可「惜也」と述べ、覺阿に法を嗣ぐ弟子がなかつたことを惜しんでいる。

(25) このほかに天台後学（天台座主）の堯恕（体系、逸堂、妙法院門跡、一六四〇—一六九五）が編輯した「僧伝排韻」巻二〇「下平声 五歌・那」にも「覺阿」の項として、
覺阿、姓藤氏、日本國人。十四得度受具、習大小乘、有聲。年二十九、屬「商者自」中都「回、言「禪宗之盛。師奮然拉

覺阿の入宋求法と帰国後の動向(上) (佐藤)

法弟金慶、航海而來、嗣法靈隱仏海禪師。後帰本國、住「觀山。見「普燈錄第二十巻及五燈會元第二十巻・統傳燈錄第三十一巻・仏祖綱目第三十八巻・教外別伝第十巻・五燈嚴統第二十巻。

という簡略な記事が存している。また大応派（妙心寺派）の妙喜宗續（棘園、一七七四—一八四八）が信濃上溝（長野県飯田市松尾上溝）の瑞雲山龍門寺の高居に籠つて、延宝伝燈錄」を抜粋編集し、天保一四年（一八四三）に刊行された「龍門夜話」巻乾にも「觀山覺阿」の章が載せられている。さらに白石虎月編「禪宗編年史」の「承安元年辛卯 南宋乾道七年」の箇所によれば、覺阿に關する史料として、大心義統の「諸宗儀範」巻一と「釈門事始考」と「禪家蒙求」を典拠の中に挙げてゐる。江戸期の撰述と見られる「釈門事始考」の「諸宗立教」の「禪宗」には「嘉応元年、觀山覺阿入宋、嗣「承瞻堂遠。東帰之後、化縁無「聞」と記されており、ここでは覺阿が入宋したのを嘉応元年（仁安四年、南宋の乾道五年、一一六九）と伝えている。

(26) 『望月仏教辞典』第一巻の「カクア覺阿」の項では、生没年とも何も記していない。古く鷲尾順敬編「日本仏家人名辞書」の「カクア覺阿」の項では生年を皇紀の一八〇三年すなわち西暦の一四三三年としている。ただし、なぜか「日本仏家人名辞書」では典拠に「元亨釈書」が含まれておらず、代わりに「龍門夜話」が挙げられている。大修館書店刊「禅学大辞典」の「かくあ覺阿」の項では生年を西暦の一四三三年とし、法蔵館刊「日本仏教人名辞典」の「かくあ覺阿」の項と朝日新聞社編「朝日・日本歴史人物事典」の「覺阿かくあ」の項で

(27) は生年を康治二年(一一四三)としてゐる。また李國珍編著『宋僧録』下冊の「覺阿」の項では生年は記されておらず、
 典拠として中国撰述の『嘉泰普燈錄』、『五燈會元』、『統傳燈錄』、『統指月錄』、『五燈全書』、『全宋詩』のみが挙げられている。

たとえば、『三大尊行狀記』、越州吉祥山永平開關道元和尚大
 禪師行狀記』によれば、永平寺の道元の場合も、建保元年癸
 酉四月九日、十四歳礼初任座主公円僧正剃髮。同日、於
 延曆寺戒壇院、以公円僧正為和上、受菩薩戒作比丘」とあり、
 一三歳で比叡山に上つた後、一四歳のとき四月九日
 に剃髮得度し、翌一〇日には座主の公円に就いて戒壇院で菩
 薩戒を受けて比丘となつてゐる。

(28) 叡山学会編『安然和尚の研究』(同朋舎刊)によれば、五大
 院は比叡山東谷の仏頂尾に存している。『延宝伝燈録』卷三
 四「他宗帰讀仏心宗諸師」の「江州叡山安然法師」の章に、
 嘗曰、檢「伝教大師所承血脈内証仏法、乃有「三種」。一達
 磨付法、二天台相承、三真言血脈。禪門付法、以伝「仏心」
 一積尊一代、多施「筌蹄」、最後伝「仏心印」、不滞「教文」、是
 諸仏心処也。

と記されているが、安然が製した『教時諍』に「今檢「伝教
 大師所承血脈内証、仏法乃有「三譜」。一達磨付法、二天台相
 承、三真言血脈」(大正蔵七五・三三五a)とあり、また「次
 仏心宗、一代積尊、多施「筌蹄」、最後伝「心」、不滞「教文」。
 諸仏心処故為「第二」」(同・三六二a)とあるから、『延宝伝
 燈録』の記載はこれに拠るものである。安然が最澄(伝教大
 師)の「内証仏法相承血脈譜」に基づいて達磨所伝の禪宗の
 相承付法についてかなり深く理解していたことが知られる。

(29) 別に『密教大辞典』や『仏書解説大辞典』に高野山の覺阿に
 関する項が存しているが、この覺阿は永治元年(一一四一)
 の生まれで、もと南都興福寺の僧であつて、実範に伝法灌頂
 を受けたとされ、文治二年(一一八六)に四六歳で『灌頂諸
 流印明』を著したことになる。しかしながら、実範は
 天養元年(一一四四)九月一〇日に入寂していることから、
 実範門下の覺阿は一代早い人とみるべきであつて、ここに
 いう高野山の覺阿とは全くの別人といふことになる。実範門
 下でない高野山の覺阿が比叡山の覺阿とほぼ生年が重なつて
 いることから、両者が同一人物である可能性は高い。

(30) 多賀宗準氏は今泉淑夫編『日本仏教史辞典』(吉川弘文館刊)
 の「かくあ覺阿」の項などにおいて、

なお、覺阿の名において行われる『談義日記』一巻が伝存
 している。『摩訶止観』、『法華玄義』、『法華文句』の中より
 要義三十二条を抜き、問答体によつて、その解釈を加えた
 もので、この著者がはたして右の覺阿その人であるか否か
 は確認しがたい。

と述べており、『談義日記』を入宋僧の覺阿の作であるか否
 かを保留している。

(31) 『仏書解説大辞典』には覺阿撰『談義日記』一巻について、

談義日記 ①(日) Dan gi nik ki ②一

巻 ③存、大日本仏教全書第二四、天台小部集釈第一九

④覺阿(承安頃 A. D. 一一七一—一一七四)撰

⑥本書は摩訶止観・法華玄義・法華文句の中のを要義三
 十二條を挙げ問答体を以て天台三大部の大綱要義を知らし
 めんと試みたもの。但し各條毎に附けたりの問答即ち從属

的に論議さるべき問題数條が附してある。このことは巻初に「談義日記目錄」があるから直ちに知られるし、同時にこの目錄を見て著者の試みた論議の傾向も知られる。本書著者覚阿の伝を見るべきものが本書には全く示されてゐない。覚阿伝は元亨釈書六・延宝伝燈錄一・扶桑神林僧宝伝一・本朝高僧伝一九・嘉泰普燈錄二五・五燈会元二〇等にある。元亨釈書等にある覚阿は天台宗の学僧で、承安元年（一一七一）二十九歳の時、禅道が宋では盛んだと聞き志を決して渡海し、宋孝宗の乾道七年（一一七一）に入宋。禅宗を伝えて帰朝。寿永元年に宋と音信を通じたといふから恐らく文治・建久頃までは生存してゐたであらう。故に院政末期の人である。若しこの覚阿が本書著者たる覚阿であれば問題はないが、本書には何等年代を推考すべき材料もなく、又趙宋天台の文献も用ひず、又真言・華嚴宗等との比較もしてゐないから直ちに本書を入宋覚阿なりとは云ひ難いが、若し本書を入宋覚阿の著なりと考へれば本書によつて談義なる仏教講演も院政時代までは未だ通俗化せず、原典の講論を漢文風に取扱つてゐたと思れるのである。これが鎌倉時代に移ると忽ちに和語流行となり、漢文風な談義が衰へたと考へられる。若し本書製作年代が決定すれば、「談義本」所謂「見聞」「聞書」「論議口決」類の変遷史研究に一道の光明を投げることになる。目錄を示せば、一、一心三觀事。二、三身喻金光明三字。三、前番後番五味。四、金光明三字是於理内立名字。五、三周声聞即身成佛。六、金光明三字名理喻否。七、止觀之能觀。八、円頓止觀之所觀。九、蓮華因果俱時前後。十、当体譬喻蓮華。

覚阿の入宋求法と帰国後の動向(上) (佐藤)

十一、光宅語略義備。十二、本迹二門明師弟因果。十三、二処三會。十四、尸羅翻名多種。十五、三種三寶。十六、法華又名方便。十七、一經三段分文。十八、二經六段分文。十九、三周說分文。二十、開三顯一之人法。二十一、四一。二十二、三軌。二十三、十二因緣名仏性。二十四、破三惑顯三德。二十五、感應道交。二十六、生身法身。二十七、三身如來俱以非滅現滅而利益衆生。二十八、四種声聞。二十九、円融四諦名無作。三十、歡喜之位。三十一、華嚴円与法華円同異。三十二、爾前法華之実相同。

⑧ 寛文五刊 ⑨ (高大、寄・一・一五)

という田島德音氏の解説が載せられており、明確に入宋僧の覚阿の作とは断定していないが、平安末期の談義における漢文の学識が称えられている。

(32)

樓鑰字は大防、攻媿主人、一一三七—一二二三の『攻媿集』

卷一〇「塔銘」に収められた「育王山妙智禅师塔銘」に、皇帝即位之十五年、有詔明州阿育王山弘利禅寺釈迦文仏舍利宝塔、詣行在所、住持僧徒那侍行。既至、命入禁中、觀堂安奉、上御素膳焚香、瞻例礼親親、殊勝。遂召那对碧琳堂、問舍利徒何発見、奏曰、自陛下聖心、発見。上大悦、親洒宸翰、大書妙勝之殿、賜那以妙智禅师号、仍度僧五員、頒錢万緡、普養優渥、前所未見。由是、宝塔之靈益顯、而那之名愈彰矣。(中略)日本国王、閱師偈語、自言、有所發明至遜。因以從釈氏、歲修弟子礼、辞幣甚恭、且以良材、建舍利殿、器用精妙、莊嚴無比。(中略)三韓万里滄海東、酋傑稽首礼益恭。

とあり、大慧派の育王從廓(妙智禅师、一一一九—一一八〇)

の伝記史料の中に日本との関わりを伝える興味深い記事が存している。また『明州阿育王山志』巻三「塔廟規制」には淳熙三年(一一七六)に阿育王山広利寺第三二代(一に第二二代とも)の住持であった從廓が記した「阿育王山舍利宝塔記」が収められている。そこには日本の国王のことは何も記されていないが、阿育王山の舍利宝塔が完成したのが淳熙三年であったものと見られ、日本の国王が良材を喜捨したのはそれ以前のことであろう。從廓は同じ阿育王山に住した大円遵瑛の法を嗣いだ高弟であり、大愿派祖の大愿宗杲(妙喜、大愿普覚禪師、一〇八九—一六三)の法孫に当たっている。「日本」と「宋」の邂逅 中世に押し寄せた新潮流(アジア遊学一二三)の横内裕人「重源における宋文化 日本仏教再生の試み」によれば、このとき阿育王山の從廓と実際に関わったのは日本の重源であり、周防(山口県)の木材を輸送して阿育王山に送り、舍利殿を修造している。横内氏は「育王山妙智禪師塔銘」にいう日本国王とは後白河法皇であると解している。また『玉葉』「承安三年三月十三日」の条に、承安三年(一一七三)三月三日に後白河法皇が南宋に贈った答信物として色草三〇枚を含む時絵厨子一脚、黄金一〇〇両を納めた手箱一合があり、平清盛の答信物として剣一腰と手箱一合が存しているが、あるいはこれも阿育王山に関する記事であろうか。ちなみに承安三年とは覺阿が帰国した年に当たっており、この点については後に触れたい。

(33) 『平家物語』巻三「金渡」(こがねわたし)の項や、『源平盛衰記』巻一一「育王山送金事」の項によれば、平重盛が亡くなる前に、船頭妙典(妙善とも)を阿育王山(医王山)に遣わし、住持の拙庵徳光(仏照禪師)に対し、自らの追善菩提のために黄金を喜捨したとされる。

(34) 同じく東京大学史料編纂所蔵の異本「三国会運」にも、四月廿一日、改「承安」、覺阿上人入宋、參「靈隱仏海遠」と記されている。なお、東京大学史料編纂所編「史料綜覧」巻三「平安時代之三」の「承安元年辛卯」の末尾には、
 覺阿宋二赴ク、善隣国宝記 元亨釈書 三国会運 郷交 徴書(一参考) 本朝高僧伝 延宝伝燈録
 とあり、覺阿の記事とその典拠となる文献を挙げているが、ここにも「三国会運」の書名が見られる。

(35) 『仏海瞻堂禪師広録』巻二「靈隱仏海禪師入内陸座録」の淳熙二年閏九月九日の箇所において、慧遠は「臣昔在「義眉山、參」尊宿、名紹微」と述べて靈巖紹微との機縁の語句を載せている。紹微は黄龍惠南 東林常総 円通可傳 浮山法真 靈巖紹微と次第する。

(36) 崇先寺は綿州(四川省)出身の曹洞宗の真歇清了(寂庵、悟空禪師、一〇八八—一一五二)が韋賢妃(慈寧太后、諡は顯仁、一〇八〇—一一五九)の帰依を得て開山祖師となった禅刹であり、おそらく慧遠は真歇下の澹堂徳朋(竹簡和尚、一一六七)の後席を継ぐかたちで崇先寺に勅住しているものであろう。なお、崇先頭孝禪寺は嘉定二二年(一一二九)に教寺に改められて崇先頭孝華嚴教寺と称している。

(37) 『仏祖統紀』巻四八「法通運塞志」の「孝宗」の箇所によって、慧遠が孝宗と関わった活動のさまを窺うと、乾道七年の記事として、
 七年二月、靈隱慧遠禪師、入「対遠徳殿」。上曰、如何免「得

生死。対曰、不悟大乘、終末能免。上曰、如何得悟。対曰、本有之性、磨以歳月、自然得悟。上曰、悟後如何。対曰、悟後始知今日問答皆非。上曰、一切处不是後如何。対曰、脱体現前、更無可見之相。上有省、首肯之。とあり、乾道八年の正月と八月の記事として、

八年正月、車駕幸_二豊隠、錫賚有加。八月、召_二天竺訥法師・径山印禪師、別峯宝印・豊隠遠禪師及三教之士、集_二内觀堂、賜_二齋。復令_二遠禪師独对_二東閣、賜_二坐。問曰、前日睡中忽聞_二鐘声、不知_二夢覺、是同是別。対曰、夢覺無殊、教_二誰分別。上曰、鐘声從_二何処起。対曰、從_二陛下問処起。十月、賜_二豊隠慧遠_二仏海禪師、号_二瞻堂。

と記されており、ここでは孝宗が覚阿のごとき聞鐘悟道の因縁を語っている。また淳熙元年に至っても、五月、召_二豊隠遠禪師、入_二对便殿、と記されており、五月に慧遠は孝宗のもとに入内していることが知られる。実際には、仏海瞻堂禪師広録、巻二「豊隠仏海禪師入内陞座録」には、慧遠が入内して孝宗の勅問に應對した問答録が収録されている。

大久保道舟『修訂増補 道元禪師伝の研究』（筑摩書房刊）の「日本仏教史上における禪師の宗教」の「興聖護國の実践」では、

だいたい禪僧がわが国家意識の昂揚に貢献したことは著明なこと、そのもつとも早きもの一つは觀山の覚阿であった。彼は承安元年宋に渡り孝宗に謁してわが国体に関する質問をつけたが、その時「国王無姓氏号金輪王、一種系授、未有移革」（元亨釈書第六）と答えたということである。

覚阿の入宋求法と帰国後の動向(上) (佐藤)

と説明しているが、覚阿が直に皇帝の孝宗に謁したかのごとき記事は存しておらず、実際はあくまで慧遠の質問に対して覚阿が日本の国情を説明したものである。

(39) 『宋史』巻四九一「外国七」の「日本国」によれば、北宋代二代皇帝の太宗（趙匡義、趙昀、九三九、九九七、在位は九七六、九九七）が日本僧の裔然（法濟大師、九三八、一〇一六）に会った際にも、日本の天皇が一姓伝継していることを問題にしている。

(40) 後白河上皇に関しては、安田元久『後白河上皇』（吉川弘文館・人物叢書）を参照。

(41) 圓城寺僧侶の伝記史料である『寺門伝記補録』巻一四、僧伝部 戊「の、長史高僧略伝 卷下、法務前大僧正覚忠 聖護院龍雲坊青蓮院長谷 三十二世」の章にも、

嘉応元年六月十七日、太上皇祝髮、聖算四十有三。御戒師、長史前大僧正覚忠、呪師、法印公舜・憲覚、剃刀、法印尊覚・権大僧都公顯、已上。御戒師、上法諱行真。法皇始自_二今日_二五十晝夜、有_二御逆修。

とあり、嘉応元年六月七日に後白河上皇が四三歳で祝髮したことを伝えており、このときの戒師を長史で前大僧正の覚忠が勤め、呪師を法印の公舜と覚憲（宝積寺僧正、壺阪僧正、一一三一—一一二二）が行ない、剃刀を法印の尊覚と権大僧都の公顯（本覚房、本覚院、一一一〇—一一九三）が行なったことを伝えている。

(42) 『大方広仏華嚴經』（六十華嚴）の「夜摩天宮菩薩説偈品第十六」には、「心如工画師、画種種五陰、一切世界中、無法而不造。如心仏亦爾、如仏象生然、心仏及衆生、是三無

差別。諸仏悉了知、一切従心転。若能如是解、彼人見真仏。(大正蔵九・四六五c・四六六a)とある。また慧遠の答えは、大方広仏華嚴經(八十華嚴)卷三三、兜率宮中偈讚品第二十四に「衆生妄分別、是仏是世界。了達法性者、無仏無世界」(大正二〇・一三三c)とあるのに基づいている。

(43) 末木文美士編『現代語訳・善嚴錄 下』(岩波書店刊)の「第七十四則」の「金牛の飯櫃」では、

金牛和尚はいつも昼食の時間になると、みずから飯櫃を持って僧堂の前で舞いを舞って、ハッハッハと大笑いして、「菩薩たちよ、さあ飯を食いに来い」と言った。

と現代語訳している。また本則の出典として『祖堂集』巻一五、『景德伝燈録』巻八、『宗門統要集』巻三、『宗門聯燈会要』巻五、『五燈会元』巻三などを挙げている。

(44) 慧遠が覺阿に対して如何なる接化をなしたのかは「金牛作舞」の公案のほかには具体的には知られないが、『仏海晴堂禪師伝録』巻四「偶頌」によれば「晴堂三句」として、

我有不入驢耳句、日盈月具未容呈、出門会得天平錯、未出門先拳向君。

我有「截水停輪句、人天路絶信来稀、等閑靠却過頭杖、門裏深沙眼截曉。

我有「和煙釣月句、山推海竭是生涯、到頭貧富知恩少、收拾帰来総一家。

晴堂一句分三句、純綱打就生鉄鑄、半夜烏鳧脱殻飛、星羅雲散無尋処。

という機関が知られている。あるいは慧遠は覺阿に対しても

「晴堂三句」などを用いて指導育成を施しているのかも知れない。ちなみに第一句の「我れに驢耳に入らざる句有り」の説示は、青原下の天平從滄と臨濟宗の西院思明による『碧嚴錄』第九八則「天平阿錯」の公案に基づいているが、後に覺阿が聞声悟道する伏線となっているように見られる。

(45) 「日本国丞相藤原公捨経之記」は藤原実経すなわち東福寺開基の九条道家(光明峰寺殿、一一九三—一二五二)の子である一条実経(一条家祖、一一三三—一二八四)が自ら「法華經」など四經三十二巻を書写し、これを無準師範の塔頭が存した杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺の万年正統院(円照塔院)に喜捨奉納したことを記念し、天童山の了慧が撰して石碑に刻まれたものである。

(46) 大応派(大徳寺派)の江月宗玩(欠伸子、大梁興宗禅師、一五七四—一六四三)が江戸初期にまとめた『墨蹟之写』の「元和六年下六」の箇所(竹内尚次注解本では八三二頁)に、つぎのような墨蹟の写しと載せられている。

一、仏化敬諸海衲祖、以伽陀溢軌、連篇雖燦煜、直与大士身光相高在。独使覺阿上人專一靈猶耶。山中龔侶、歡意踊躍、翕成頌歌、彊雖殊道理寥闊。固知未拳筆於華頂、辰之上巳、点首於扶桑島樹之旁。無白雨塗糊、適以驚桑。

宝祐四年王春正月、天台沙門。

觀音妙智力、難量航海梯扶桑、石橋影聖地、一輪紅日耀扶桑。

住山妙。「妙湛」 道訓より来候

覓覓応現美顔開、弱水滔々雲浮来、唯 石橋無咲朽、如々元只在天台。

帛内、横一尺五寸七分、竪九寸七分。

一、太平万年賀、因作万年歡歌、而示之。

雖陽春白雪、音律未諧、能使眼裏聞声底、不惟見。

大士() 一僧

鼻() 一由

觀() 一白日

月() 一証

円() 一乎

日本() 一万年

山々() 一南

可() 一峯

見() 一之

日、前太平西堂 謹跋。「妙傑」

道訓より来候。帛内、横一尺六寸四分、竪九寸七分半。

大宋万年山へ、日本將軍ヨリ觀音像ヲ造、被納候。其使

者帰朝ノトキ、万年山ノ長老衆作頌、饒ニセラシ候。此舒

二御座候。是ハ其跋ニテ御座候。筆者ハ其トキノ住山ニテ

妙傑ニテ御座候。覺阿上人ハ此觀音ヨリ先ニ、日本將軍ノ

万年山へ觀音送ラシ候使と、聞伝申候。其モ又是ヨリ別ニ

御座候。覺阿上人ノ使ニ入唐ノトキ、宝祐四年八年号カト

存候。道訓所ヨリ如此かきて添来候也。

この墨蹟を所持していた道訓(未詳)が現物とともに書面

で添え書きして宗玩に示したものらしいが、全体的に文意が

取りにくい上に、後段は省略された箇所がきわめて多く、ま

た注記の記事内容に錯綜も見られるようである。ただ、そこ

には覺阿上人の名が存しており、天台山の万年寺と関わった

覺阿の入宋求法と帰国後の動向(上)(佐藤)

覺阿といえは、いま問題としている意遠に参じた覺阿と見て

間違いないであろう。宝祐四年(一二五六)正月の年記は、

すでに覺阿が天台山を訪れてから八〇余年を隔てており、万

年寺住山の妙湛が寄せた偈頌が載せられている。また前太平

西堂の妙傑は跋文を寄せているが、内容は大幅に省略されて

おり、文意は全く辿れず、年記なども付されていない。ここ

にいう万年寺住山の妙湛と前太平西堂の妙傑とは具体的に如

何なる禪者を指しているのであるうか。いうまでもなく妙湛

とあるから、示寂年時からして著名な大慧派の笑翁妙堪(一

一七七—一二四八)とは別人と見なければならぬ。興味深

いのは「仏祖正伝宗派図」や「正誤宗派図」四に、「径山虚舟

普度」の法嗣として、「神社隱巖妙傑」と「天童秋江妙湛」の

名が載せられており、南宋末期に活躍した松源派の虚舟普度

(一一九九—一二八〇)に参じて法を嗣いだ高弟に隱巖妙傑

と秋江妙湛という二禪者が存していることであろう。普度が

金陵(南京)府城東七里の半山報寧禪寺に開堂出世したのは

淳祐年間(一二四一—一二五二)の初年の頃であるから、両

者が普度にとつて最初期の高弟であったならば、それより一

〇数年を経た宝祐四年の時点で、すでに妙傑が台州天台県西

北五〇里の万年報恩光孝禪寺の住持を勤め、妙湛が後に天台

県東北二五里の太平興國禪寺の西堂として跋文を寄せる可能

性は十分に存しよう。隱巖妙傑については「江湖風月集」巻

下に、「隱巖傑和尚」として二首の偈頌が収められており、

「仏祖正伝宗派図」などでは松源派の虚舟普度の法嗣として

「神社隱巖妙傑」と記されている。ただし、妙傑が住持した

神社寺というのがいづれに存するのかは明確でない。一方

秋江妙湛については『山菴雜錄』卷上「台州広孝秋江湛禪師」の項が存し、台州黄巖県断江の人とされ、いくつかの逸話を載せているが、嗣法については記されていない。『増集続伝燈錄』卷六「目錄」では破庵派の方山文宝の法嗣として「広孝秋江湛禪師 無伝」とあり、『仏祖正伝宗派図』などでは松源派の虚舟普度の法嗣として「天童秋江妙湛」と記されている。同一人物とすれば、普度と文宝の両者に参じているのかも知れず、台州の広孝寺に住持したことは記されているが、あるいは何らかの事情で元代初期に変則的に天童山にも住持する機会が存したのかも知れない。ただし、『天童寺志』や『扶桑五山記』一、「天童住持位次」その他には天童山の歴代住持者に秋江妙湛の名は存していない。

(47) 南宋代の長蘆寺については、椎名宏雄「宋代の真州長蘆寺」(駒澤大学中国仏教史蹟參觀団編「中国仏蹟見聞記」第八集に所収)を参照。なお、且庵守仁については『叢林盛事』卷上「且菴仁和尚」の項に「越之上蘆人、少習天台教。初目括菴、随雪堂過衝之烏巨。(中略)後住長蘆、法席大振」とあり、衢州(浙江省)烏巨寺の雪堂道行(一〇八九—一一五一)の法を嗣いだ後、諸刹の住持を経て長蘆寺に遷じ、法席が大いに振ったとされる。淳熙一〇年(一一八三)に示寂し、語録として『且菴和尚語録』が世に行われたとされるが、残念ながら現存していない。また心聞曇賢は温州永嘉の人で、阿育王山の無示介謙(謙鉄面、一〇八〇—一一四八)の法を嗣いだ後、天台山の万年寺や温州永嘉の江山龍翔寺に住持している。『鄮峰真隱漫錄』卷三五「贊」に「永嘉長住長蘆心聞眞師眞贊」が存するから、曇賢が長蘆寺にも住持し

ていることが知られる。その系統は心聞曇賢 雪庵從瑾 虚庵懷敏 栄西と嗣承する。

(48) 檀本涉「日中・日朝僧侶往来年表(一一二七—一二五〇)」(平成一六年三月、東京大学大学院人文社会系研究科・村井章介編「八—一七世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流 海域と港市の形成 民族・地域間の相互認識を中心」(上)「に所収)の「覺阿」に関する註によれば、

『嘉泰普灯録』は、覺阿が一一七二年秋に長蘆に至り江岸で鼓声を聞いて頓悟したとするが、靈隠寺に戻った覺阿に暗堂慧遠が与えた法語「『仏海録』三示日本国覺阿」では、「江北より金山に回至して、法鼓を撃つを聞き」大悟したと述べられている。大悟の場が長蘆説と金山説で分かれるが、長蘆は石白湖畔にある土地で、長蘆の「江岸」と記す『普灯録』は不可解である。史料の信憑性も考え、一応金山説に依る。ただ「長蘆」と具体的に地名を記す『普灯録』にも何らかの根拠があるかも知れない。揚州から長江を南渡する時の拠点である金山を経て長蘆に向かった可能性を考え、表では?付きて長蘆も挙げておく。

と記しており、檀本氏は金山説を採りながらも長蘆説を加味した解釈をなしている。